
次はひまわり畑で

Wanda

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

次はひまわり畑で

【Nコード】

N0139P

【作者名】

Wanda

【あらすじ】

高校生二人の、あまり一般的ではない別れの物語。
扇情的でない全裸の描写、性交渉に関する話題、飲酒表現などがありますので、気になる方は回避して下さい。

1 (前書き)

自サイトにUPしているものの転載です。

射るような強い光で目を閉じて、次に開いた時には今までいたはずのカラオケ屋は消え去っていた。

「……何？」

口から出たつぶやきに、目の前にいた人が振り返る。わたしと同じか少し年上くらい、彫りが深めの顔立ちをした男の子だ。

「げ。なんで……」

その人は、驚いたようなすごく嫌そうな表情をしてつぶやく。そんな顔を照らす明かりが不安定に揺らめいているように見えて、わたしは初めて周りを見回した。

ずらっと、黒服の人に囲まれていた。

「ひえっ!？」

今の今まで掴んでいた何かから手を離し、思わず胸の前で乙女チックに握り合わせる。隣同士などで口々に話していた人たちは、わたしの叫び声で一斉にこちらを向いた。

見るからに怪しい、コスプレじみた黒い服の人たちのうち、一人が足を少し踏み出して何かを言う。どこか舌に巻きが入っている話し方で、少なくとも英語には聞こえなかった。

日本人には発音できなさそうと思っていたのに、そばにいた男の子はごく当たり前の様子で何かを答える。その途端に、周りの人たちがわっと湧いた。何かとても嬉しいことがあったのか、互いに手を取り合っていたりもする。格好の割に行動は普通だ。

そうして改めて見回したここは、どこかの室内みだった。所々に、揺らめく光の元……ろうそくが灯っていて、壁は観光地にあるような石を積み上げたもの。広さは学校の教室より少し狭いくらいだ。

「ここ、どこ？」

さっきのつぶやきから言葉が分かるはずの男の子に問いかけると、

周りにいた人たちの騒ぎがぴたりと止まった。そのあまりに不気味な光景に、思わず男の子へ寄り添うようにしたところで、誰かがきつい口調で何かを言う。むーとか外国人のような調子でうなっていた男の子は、唐突に日本語で叫んだ。

「ああちくしょう、忘れちまってる！」

たじろぐわたしの腕を誰かが掴む。振り向くと、黒服の一人がすぐそばでわたしをにらみつけていた。その四十か五十くらいのおばさんは、わたしじゃなく男の子の方を見て何かを言い、そのまま腕を引っ張りだす。

「何するの！」

「待てっ。じゃなくウェイ！　なんで英語っ！」

一人で混乱する男の子には構わず、おばさんはずんずん歩いて行く。そして向かった先にあったドアの前で立ち止まり、部屋の中の……たぶん男の子に向かつて、わたしから見ても丁寧に頭を下げた。そのまま、待機していた人が開いたドアをくぐり、外へ出ようとする。

「あの？」

訳が分からないまま連れて行かれようとするわたしの耳に、さっきの男の子の声が届く。

「メグは同級生だ！　無害だよ！」

それを聞いて思わず振り向いた目の前で、ドアは閉ざされた。メグ、恵美は確かにわたしの名前だ。同級生って言っていたから、面識があっただんだろうか。

考えようとする耳に、腕を掴んでいるおばさんの厳しい声が聞こえる。そちらを見ると、部屋を出てから新たに灯された白い奇妙な光を浴びて、その顔はついたじろぐほどの怖い表情を取っていた。わたし、もしかしてピンチ？

今日……いや、もう昨日か、は、高校の卒業式だった。大学に受かった人、まだこれからの人、就職を決めた人。これからそれぞれ

違う道に行くけれど、最後にみんなで遊ぼうってことで、焼き肉を食べに行ったはずだ。

元気のある子はそのまま近くのカラオケ屋でオールすることになり、わたしもそれに付いて行った。それで確か、トイレから戻ろうと廊下を歩いていたら、はず。

目隠しと猿ぐつわを外され、泣きすぎたせいで重いまぶたを開けようとする。

「もうちよつと待って」

すぐそばから聞こえた声に、反射的に身を縮こめる。手首にかけられていた縄も解かれると、そばにいた人がどこかへ去って行ったのが分かった。

「もついいぞ」

恐るおそる開けた目にまず映ったのは、奥の窓から差し込む朝の光。そして、その前にたたずむ見覚えのある男の子だった。

じつとこちらを見つめるその子の視線から、逃げるように周りへ目をやる。装飾付きの立派なソファに重そうなローテーブル、壁際には壺なんかが載った棚。即座に思い浮かべたものは、ホテルのスイートルームだった。

周りをきよるきよる見てから、改めて向き直ると男の子はまだこちらを見ていた。さすがに不気味さを感じてうつむくわたしへ、ゆっくりと切り出す。

「なんつったらいいだろう……とりあえず、座るか？」

そしてソファの方を示す。うなずき、先に男の子が座るのを確認してから、向かい側に腰掛けて膝の上で手を揃える。ローテーブルの上にはおしぼりと陶器の壺みたいなもの、それと木のコップが二つ置かれていた。

「顔拭いて」

言ってテーブル越しに渡されたおしぼりを、おじさんみたいなこととしてると思いながらも使う。そうしてから顔を上げると、男の子は壺みたいな容器から黒っぽい液体を注いでいた。まず自分が飲ん

でから、もう一つの方にも注いでわたしに示す。

「飲むか？」

言われたものの戸惑う。得体のしれないものを口にしたくないと思う一方で、飲み物を前にいきなりのどの渴きを感じてしまっている。覚悟して受け取り、口元に持って行ったそれからはほのかなアルコールのおいがした。

「えっと、これお酒？」

「うん。アルコール度は低いよ」

言って、同級生だと言っていた男の子は、何も引つかかることがないように飲む。まだ未成年だし、朝っぱらからの飲酒には気が引けるんだけど、

「ね、水はないの？」

「あるけど、たぶんメグは腹壊す。それに日本の水道水よりまずい」
ごく当たり前に名前を呼ばれ、ひるんでからコップに目を落とす。
「それだったら……」

口に含んだそのお酒は、ほのかな苦みと甘みがある以外はほとんど水に近かった。のどから胃にかけてがちょっと熱くなったことで、確かにお酒だと分かったくらい。大きめのコップを両手で持って少しずつ運ぶわたしに、男の子が話し掛けて来る。

「眠れ……た訳がないな。怪我はないか？」

「うん」

コップから少し目を移すと手首に縄の跡なんてものが見えるけれど、幸い傷らしい傷はない。

言いたくなかったら黙っていいと前置きをしてから、男の子は聞く。

「昨夜あの後、何された？」

日本で普通に見るより薄い色をしている目で、男の子はさっきみたいじっと見つめて来る。口では言わなくていいと言っても、知りたいから聞いているんだろう。

わたしは大きく呼吸をすると、目を伏せ気味にして一息で言った。

「裸にされてあちこち触られた」

最初にいた部屋から引つ張り出したおばさんは、そのまま近くの違う部屋まで連れて行くとそこにわたしを閉じこめた。閉まったドアにかじりついてすぐにまた開けられ、後ろにすっ転んだけれど、おばさんと、一緒に来た若い女の人は笑いもしないでいきなりわたしの服を脱がし始めた。

文句を言う余裕があつたものは最初だけで、物にするような乱暴な扱いで全身を触られ始めてからは、さすがにしゃべる氣力を無くしてしまつた。

気持ち悪くて泣き出すわたしには一向に構わず、したいことが済んだのか同じく乱暴な調子で服を着せられて、身動きと視界と声を封じられた。そのまま女の人たちは出て行つてしまい、ドアが閉まつて以降は、一切の音が消え去つた。

叫んでもくぐもつた声しか出せない、身動きを取るとすぐに壁にぶつかる。わたしはそんな状況に耐えられるほど、タフな人間じゃない。

だから、確かに日本語で「ユウが呼んでるよ」と声を掛けられ、足の縄だけでも解かれた時には心からほつとした。それでまた泣いてしまったわたしの背中をそつと撫でて、やわらかい声の人はこの部屋まで連れて来てくれた。

……静かな気持ちになつてから振り返ってみると、あの人の声は知っていた気がする。どこで聞いたんだろう。

思い出して複雑な気分になつているわたしの前で、男の子がソファの背もたれに寄り掛かる。そうしてぽそつとつぶやいた声は、耳にしっかり入つて来た。

「なんだ、それだけか」

あまりといえばあまりの言い方に目をむく。

「それだけ!？」

少し前のめりになるわたしに、一度やべ、という顔をしてから真顔になる。

「いや、無理やり吐かせるくらいはやると思ったから。女なんだし、知らない人間の前で裸っていうのはきついか」

「はく、って」

男の子は目を見開く正面で、片手を上げて淡々と言う。

「戻すの『吐く』な。体の中に凶器を隠すなんてザラにあるから、下剤突っ込まれなかっただけいいと思わないと」

裸にされるよりも気持ち悪いことを言っ、その子は背もたれから身を起こした。

「すぐ帰れるように手配するから。それまで、狭苦しいだろうがここへ居てくれ」

「ここって、この部屋？」

見回したここは最初にいたところと同じで、六畳あるかないかのわたしの自室よりもずっと広い。どの辺が狭苦しいんだろう。

「嫌ならほかに用意するけど、あまりうるうるはしない方がいいよ」
知らない男の子の勝手な言葉に、不快感が湧き上がる。

「どうして？」

「今ここ、昼ドラ的どろどろ事件の休戦中だから。俺の知り合いってだけで危ない」

訳が分からない。そう思ってから、ものすごく今更のことに気づく。

「あの……ここ、どこ？」

黒服に囲まれ素っ裸にされ、その後暗い中に転がされていたせいで、その辺りのことを疑問に思う暇がなかった。男の子は目をそらし、何か考えるようにしてから言う。

「海外にある、俺の家」

あまりうまくごまかせていない。知らない言葉と高いホテルみたいな部屋から、少なくとも昨夜居たカラオケ屋じゃないとは思っていたから、ふうんとうなってはみた。今頃、みんなどうしているんだろう。

近くに居そうにない人たちへ思いを馳せ、気を取り直してまた訊

ねる。

「その俺さんの名前は？」

「あー……」

何か言っただけで発音がよすぎて聞き取れなかった。

「なんて？」

「ちよい待て」

口の中でもごもごやってから、言い直す。

「ユウでいい」

その、ごくありふれた呼び名から思いだせることはない。わたしは薄いお酒の表面をじっと見つめ、一口飲む。あまりおいしいとは思わない。

「同級生って言ってたよね？」

「言っただけ？」

「昨日、最初の部屋で」

ユウは考えているような様子になる。それだけでは、思いだそうとしているのかそのふりをしているだけなのかは分からなかった。クラスにはこんな子いなかったし、本当に誰なんだろう。

こんな時、携帯があったなら誰かに聞く……のは無理でも何かヒントが得られるのだらうに、あのカラオケ屋の部屋に置いてきてしまった。

男の子はわたしの疑う目も気にせず、まったく変わらない様子で言う。

「まあ、向こう帰ったらクラスの人間全員に聞いてみる。一人くらいは名前を知ってるかもしれない」

「そんなに目立たない人だったの？」

女子に騒がれるような感じじゃないけど、日本人離れた顔立ちは埋もれるものでもないと思う。しげしげ見るわたしに、ユウと名乗った人はニツと外国の映画で見るような笑い方をした。

「学校つてのは特異な行動しなきゃ注目されないよ」

「そうだけど」

はつきりしたことを言わない様子に少しいらつき出した時、ドアが静かにノックされた。ユウが何か（たぶん誰だ、的なこと）を言うとか外から返事がある。二言三言交わしてから中に入って来たのは、ユウと同じようにエキゾチックな顔立ちの女の人だった。スマートなパンツと少し装飾がついている体に沿うブラウスは、どこか歌劇の衣装を連想させた。

穏やかな調子で話す女の人に対し、ユウはついさっきまでわたしと話していた時よりきついしゃべり方をしている。何事かと交互に二人を見ていると、女の方はわたしに向かって言った。

「今晚の十二時には向こうに帰れるぞ」

「え」

突然の日本語に、女の方が朝ここへ連れて来たあの人と一緒だと気づく。やっぱり、声だけじゃなく姿にも見覚えがある。

話している人ばかり注目して、内容を理解しないでいるわたしに構わず続ける。

「向こうも同じだけ時間が流れているが、卒業式の直後だからちょっと羽目を外した、くらいで済むだろう」

「ええと」

向こうというのはわたしが昨夜までいたあそこなんだと思う。それで時間が同じだけ流れて、ということは、今現在わたしは目下行方不明中？

正面で話を聞いていたユウが女の人に問う。

「そんなにすぐなのか？」

「そうだ。今夜を逃せば次は二十九日後になる」

言って、女の方は言葉を変えて何か言った。途端に力チンと来たような顔をするユウを笑って、何か促すように手を差し出した。語尾を強く言い切ったユウは立ち上がり、そこではつと気づいたようにただ二人のやり取りを見ていたわたしへ向き直る。

「ちよつと用事ができたから行ってくる。お昼過ぎには一度戻ってこれると思うから、腹減ったなら先生に言って」

少し強めの口調で告げ、わたしが慌てて立ち上がる頃には女の人が入って来たのとは違うドアを開いていた。先生って、この女のこと？

大きな音を立てて閉まるドアをぽかんと見て、「樋口さん？」の呼びかけで我に返った。

「あ、はい」

この人もわたしの名前を知っている。何か、言っていないのに名前を呼ばれるのはとても気味が悪い。でも、先生って呼ばれていたから、もしかしたら……、あ。

「体育の、吉川先生？」

呼びかけると少し驚いたようにしてから、ふっと笑う。

「覚えててくれたのか」

「はい。若い先生って珍しかったし」

正直に言つと声をあげて笑った。二年生の間と三年の前半に、産休の先生に代わって体育を見てくれていた先生だなんて、見覚えがあるはずだ。

「わたしも最後に受け持った生徒だったからな。樋口さんたちのことはよく覚えている」

先生は部屋の中をすたすた歩くと、さっきまでユウが座っていたソファに腰掛けて言った。

「せっかくだ、あの子が言いたがらないこと話そうか。なんでも聞いていいぞ」

「じゃあ」

色々ある疑問は置いておいて、今一番聞きたいことは。

「……あの、トイレってどこですか」

恥ずかしさをこらえて言ったのに、思い切り笑われた。

そりゃあの子には聞くに聞けないな、と案内してくれたところで用を足して、元のソファに戻る。さっきユウが座っていたのと同じ場所にいた先生は、恥ずかしがるわたしを見て何も言わずに口元だけで笑った。そうしてわたしが向かいに座るのを待ってから、口を開く。

「じゃあ改めて質問コーナーと行こうか」

「はい」

先生の言葉を受けて、じゃあとしばらく迷う。山ほど聞きたいことはあるけれど、一番はやっぱり、

「ここって、どこなんですか？」

ということだ。

カラオケ屋から謎の暗い部屋二つを経てホテルのスイートルームに移動。わたしの感覚は、この間に一度も外を歩いていないと言っている。何が起きているのかまったく分からなくて、今の心には不安と気持ち悪さしかない。

やきもきしているわたしを、先生はまっすぐに見つめて来る。

「ここか。ここはな」

そして、不器用にごまかしていたユウとは違って、あっさり答えてくれた。

「樋口さんには、違う惑星って言ってしまえば一番分かりやすいか。この辺りは大体十七〇〇年頃の西ヨーロッパに近いと思う。ファンタジーが好きなら異世界って言うんだが、本は読むか？」

聞かれて首を振る。紙媒体のものとというと、ファッション雑誌が話題の映画の原作くらいしか読まない。一度部屋の中を見回し、元いたところとインテリアに大した違いがないことを確認してから向き直る。

「違う星……って、人はまだ月にしか行ってませんよね？」

色々夢を語りながらも、人がほかの星へ行つた出来事は未だ何十年も前の一度切りだ。それすら、否定している人もいる。

「宇宙開発方面ではな」

先生は薄く笑つたままで立ち上がると、窓辺へ行つてわたしを手招いた。

「見た方が早い」

外に何が、と見下ろした先には広い芝生の公園。朝早い時間だというのに、犬の散歩をしている人もジョギングの人もいない。

「下じゃなくて、空。右手の方に、動かない白いものがあるの分かるか？」

言われるまま見上げた目に、青い空と白い雲、そして小さな小さな白いものが映る。三日月の形をしたそれは、飛行機っぽい感じなのにいつまで経ってもそこから動かない。

「なんですか、あれ」

「この星の衛星の一つ。『子どもの月』みたいな呼び方されてる、地上から見て小さい方の月だよ」

えいせいって何かと思つたら月のことか。って、

「あれ、月なんですか!？」

思わず空にある飛行機もどきを指さして問う。先生は目の上にひさしを作り、まぶしそうにしながら続けた。

「うん。あれと、この星には月がもうひとつあって、その公転周期が地球の月とほぼ一緒。だから向こうとこことが繋がられるとか、繋がられないとか」

「どっちなんですか」

横目で見ながらつつこむと、口元だけで笑う。

「向こうで銀河の誕生について延々議論していたのと同じで、こつちでも目下研究中。まあ、その関心は外宇宙よりも」そこで一旦言葉を切り、「魔法、で行ける異世界の方に向いているな」と締めた。今度は魔法、ね。

「あのー……」

どこまで本当なんですか、と訊ねる前に先生はこちらに向き直る。「スペースシャトルがなぜ宇宙に行けるのか、飛行機がどうして飛ぶのかを説明できる？ もっと単純な、自転車がどうして走るかは？」

「え、それはペダルをこいで」

「そう」

反論しかけたのを途中でさえぎられ、更に続く。

「ペダルをこいで、チェーンで動力を伝えて後輪を回転させ前進させる。でもあれをまったく何の練習もなしに乗りこなす人は、まあいないね。何も知らない人がどうしてそんな不安定なもので走れるんだと聞いてきた時に、バランスを取れるように延々練習したからって説明する？ もう面倒で『魔法でいいや』って思わないか？」

「え……あの」

思わない、けど。確かに先生の説明をこれ以上聞くのは面倒な気がして来た。

「ようするに、知らない人に説明するのが面倒な技術だから、『魔法』でいいやってことだ。OK？」

何か妙にいい発音で同意を求められ、ただ「OKです」と平坦に答えた。

ここがほかの星ということとは、一応理解した。と、いうか、今夜に帰れるのなら理解したってことにしておいて、向こうに帰った後忘れてしまえばいいと思う。

先生は窓の正面から動いて日陰に入り、わたしへの説明を続ける。「わたしたちはこの生まれで、諸事情であそこに避難していた。地球が避難先選ばれたのは、こと一日と一年の長さがほとんど同じで、そっくりの種族が暮らしていたからだ。一人だけ成長の度合が違う、では妙なことになるからな」

先生の言い方だと、こと地球のほかにも、人が住める星があちこちに存在していることになりそうだ。そんなことってあるのと思いがながらも、それは置いといて違うことを聞いた。

「どうして違う星なのにわたしと先生はよく似た姿なんですか？
テレビに出るような宇宙人っぽくないですね」

わたしのもっともな問いに、先生は軽く肩をすくめて言う。

「わたしはそこまでは知らない。ここでも誰も調べられていないと思う」

「そうですか」

「ただ、向こうで、ほとんど同じ環境で生命が発生した場合ほとんど同じ進化の過程を辿るって文章は見た覚えがある。まあここでは人は神に作られたことになっているから、進化とかそんなこと言ったら坊さんに怒られるがな」

先生の言葉に、つい視線を窓の方へやった。

「かみ、さま」

そうか、ここには神さまがいるんだ。現代日本で生まれ育ったせいか、神さまなんてものはとても遠い、人を精神的に追い詰める象徴のように感じてしまう。目をそらすわたしの肩を、先生は軽く叩いた。

「向こうは向こう、ここはここ。ここに猿らしき生き物がいないことも大した問題じゃない」

それは大した問題なんじゃ……うつん、深く考えない、考えない。自分で自分に言い聞かせていると先生が訊ねてきた。

「ここがどこか、理解できたか？」

「はい」

授業の時みたいな言い方にこくりうなずくと、また肩を軽く叩かれる。そのまま先生はソファに戻り、机の上にあったコップへ壺から勝手にお酒を注いで飲んだ。分からない言葉で何か言い、自分の言葉に自分で納得行ったような顔をしてまた中身を足す。それを眺めてから、わたしも窓辺から離れてソファへ座り直した。

先生はお酒をぐびぐび飲む合間に訊ねて来る。

「よし、次の質問は？」

「えっと……」

「まずここがどこなのかは分かった。じゃあ次は。」

「あのユウって、誰なんですか？」

先生は驚いたように黙り込んでから、逆に問い掛けて来る。

「ノガミユウキって、クラスにいなかったか？」

聞かれて記憶をたぐる。『ノ』だったら五十音順で出席番号はわたしのすぐ前はずだ。でも、前の人は西さんだった。

「いませんでしたよ？」

返事をする、先生は少しうつむいて何かを低くつぶやく。居ないとおかしい人なんだろう。またしばらく黙ってから先生は言った。

「あの子は、『野上勇樹』って名前で向こうで暮らしてたんだ。で、樋口さんと同じクラスだった。覚えがないか？」

まったく心当たりがなかったせいで固まり、慌てて首を横に振る。「すみません、覚えてないです」

先生は軽く息を吐くと、酒の入ったコップをテーブルに置いた。「あっちの人間とは二度と会わないから、戻ってくる時に周りの人の記憶から消えるようにするとか言っていたが、本当にしたんだな」その映画のような話にただ瞬きをする、先生は顔を上げて笑いかける。

「写真とかは残ってるはずだから、向こう戻ったら見てみるといい」「……はい」

写真は記録と想い出を残すものと、わたしは思う。記憶にない人が写っているのって、少し不気味じゃないだろうか。

会っているらしいのにまったく知らない男の子、野上勇樹。朝話した限りでは大人しそうな男の子だったけど、学校ではどんな子だったんだろう。それを知りたくても、先生の話じゃあ分かる人はいない。

複雑な気持ちが湧いた頭を一度振って切り替えて、次に聞くことを探す。ひとまず名前とクラスメイトだったらいいことは理解できたので、さっきの言葉で気になった部分を訊ねた。

「それでその、向こうに逃げてた、ってというのは？」

わたしの問いに先生はにやりと笑う。

「単純なことだ。この家は金持ちで社会的地位もあって、その主人に収まりたいと思う人間がたくさんいた。あの子の親が当主だから生まれた時からそんな身内同士の泥沼の争いのど真ん中にいたんだよ」

作ったような話だったけれど、さっきあの男の子が言っていたどろどろという部分に納得が行った。でも、財産やお金目当てで身内と争うって、それは昼ドラというよりサスペンスの世界では。あれ、一緒？

ちよつと首をひねりながらも更に問う。

「それで、地球にまで逃げてきたんですか？」

「ああ。十歳の時に一度本当に危ない目にあって、それでいつそのことって話になってな。ここにはさっき言った魔法があるから、よっぽど上手に隠れないと常に発信機をつけられているようなことになるんだよ」

だからって、わざわざ違う星まで行かなくても……。よっぽど、危なかったんだろうか。

「向こうは人の管理がしっかりしているから、もぐりこむのは大変だったな」

先生はそう、どこか憂い顔で言う。でももぐりこむって、何か犯罪犯しているんじゃない。あ、それも魔法使ったんだ。もう突っ込んでモキリがなさそうだから、そう納得しておくことにした。

先生の前で何と呼ぶか少し迷ってから、結局こう呼ぶ。

「勇樹くんって、先生と二人だけで向こうにいたなんてことはないですよ」

そんなわざわざほかの星まで逃がすような人を、たった一人で見守ることはないはずと問うと、びっくりするようなことを言われた。

「そりゃ当然だ。おばのわたしと」

「おば！？」

「あと育ての親みたいな夫婦と、その子どもとだな」

「おば!？」

何度も大声をあげるわたしを先生は呆れた目で見ると驚きすぎ」

親しい様子だったから、お姉さんとはいかなくても親戚の人かなくらいは思っていた。でもおばと甥っで。

「先生って三十行ってませんよね」

失礼と思いながらも、試しに聞く。

「いや、今三十一だぞ」

それにしたって歳が近い。ええつと、ユウがわたしと同じで十八だから十三歳差？ わたしだったたらそんな人をおばさんなんて呼べない。あ、だから先生って呼んでたのかな。

ふと、思いついたことを訊ねる。

「もうひとつ失礼なことを聞きますけど」

「うん？」

「独身、です？」

「いや？」

あつさり否定された。ユウが十歳かもう少し後に向こうへ行って、七年か八年か。だとしたら先生はそれより前に結婚してたんだ。

既婚者だったことはおばと甥だったことほど驚かずに、先生が学校にいた間よく話題になっていたことを聞いた。

「科学の梶先生のアタックを避け続けてたのって、結婚してたからですか？」

「いや、ただ単に好みじゃなかったから」

ものすごく、単純なことだった。梶先生、もう会わないだろうけどいいお相手見つけてねっ。

つい吹き出してしまったわたしとは対照的に、しみじみした口調で言う。

「七年間放置していたのにわたしのことを忘れていなかったのには、びっくりしたな」

何のことだろうと考え、今の流れから意味を知る。

「それって、旦那さんがですか？」

「そうだよ」

「あのー、やっぱりそれは、愛が……」

言ってるうちに恥ずかしくなつて、口だけをもによもによ動かす。先生はそんなわたしを見てふつと笑いを消した。

「向こうへ行つて一番不思議だったのが、その感覚だったな」

「え？」

まばたきをするわたしに、シリアスな顔のままでつらつら言う。

「わたしたちみたいな立場の人間は、好きな相手と結婚することがまずないから、愛があろうがなかろうがどうでもいいんだ。嫌な相手でもそのうち慣れるし、慣れなきゃ慣れないで子どもだけ作ればひとまず周りへの義理は果たせるからな」

お見合い結婚もちよつと嫌だと思つていたわたしは、先生の言葉に目を丸くする。

「でも今のあの国では、好きな相手と結婚しないと不幸みたいな風習がある。わたしなんかはとくに人格が形成されてから行ったから、そういう思想の影響も受けなかったんだが。ユウたちがどうなるか心配だった」

先生の口ぶりだと、まるで好きな相手と結婚するのがおかしいみたいに聞こえる。でもやっぱり、一生一緒にいるなら好きな相手の方がいいんじゃない……？

納得できなくて顔をしかめるわたしには構わず、先生は更に続ける。

「向こうの人間を嫁に連れ帰りたいとか言い出したらどうしようかと思つていたが、まあその辺は思い留まつたみたいだ」

ほんの一瞬だけ何か表情を陰らせてから、わたしに向かって笑つた。

「わたしは夫のことは愛しているよ。でもそれは、たぶんきみたち日本の子どもが思い描くものとは違うんじゃないかな」

すぱつと言うその人が、何かとても遠く感じた。

すぐに知りたいことが無くなってしまっただけからは、なんとなく学校についての話をしていた。先生がいなくなっただけからの梶先生の落ち込みっぷりは教師としてどうなんだとか、いつこ下の子たちの修学旅行でお腹壊す子が続出して大変だったとか。ユウが本当にわたしと同じ学校だったらもう知っていることもかもしれないけれど、先生は相槌を入れながら楽しそうに聞いてくれる。

「こののんびりしてるってことは、樋口はもう進路決まってるんだな」

話が途切れた時に、先生から来た問いにうなずく。

「はい。もう去年のうちに決まってきました。四月の一日の入学式まではお休みです」

でも、友達に一人、いつまでも決まらず自宅浪人でいいとか言い出す子がいたから、卒業式まではあまり遊び回ることもしていなかった。

「じゃあ卒業旅行とかは行かないのか？」

「いいえ、行きます！」

今一番楽しみなことを聞かれて、身を乗り出させる勢いで言う。

「来週、進路が決まってるみんなと東京に行くんです！ もう楽しみで楽しみです！」

初関東・初日本最大の遊園地だからと、お金はお正月からこつこつ貯めていた。行きも帰りも夜行バスだからちよつと大変そうだけど、体力が続く限り遊び回るつもりだ。

「関東か。結局旅行は一度も行かなかったな」

どこかしみじみ言う先生に、ふと湧いた疑問をぶつける。

「なんであそこに住んでたんですか？」

地方都市の外れの、特に都会でも田舎でもない辺りだ。名所もなく、楽しみは年に一度の花火大会くらい。先生はわたしの問いかけに「ああ」とうなって答える。

「最初に出たのがあの辺りだったから」

特に理由はなかったらしい。

「日本にいたのもたまたま？」

「そうだよ。最初に治安のいいところへ、と願ったらあそこだった」
国内平均ではあまり治安がいいと思われてない地域に近かったけれど、あの辺りも外国から見れば大分安全らしい。のどが渴いて来たので目の前の液体……お酒を飲んで、また聞く。

「こっちって治安悪いんですか？」

「あつちで世界史の本を読み漁ったが、同じような時代から比べるとこちらの方が少しだけいいようだな」

「へえ」

関心はしてみたものの、世界史の授業は大抵寝ていたので中世だか近世だかのヨーロッパがどんな場所だったのかはとっさに思い出せない。毎日舞踏会をやるような、ああいうイメージでいい？

先生が何か言いかけた時、ドアが控え目に叩かれた。分からない話になりそうだったので誰かが来たことにほっとしていると、先生は軽く息を吐いて立ち上がる。

「向こうに行ったことはいい勉強になったよ。生かせられるかどうかはともかく、知識だけは山ほど詰め込めたから」

そして、そばまで行くと外の誰かとドア越しに話し、ソファに座ったままのわたしを振り返る。

「ユウが戻ってくるって。わたしはちょっと用事ができたから行ってくる」

「はい。行つてらっしゃい」

先生が出て行くのを見送り、大きく息をついた。もしかしたら、体育の先生だったのはあの学校の非常勤講師の空きがそれしかなかったからで、特に専門じゃないのかもしれない。そもそも教員免許を持っていたのかについては、まあ置いておこう。

それでも、先生の授業はよかったと思う。日本人離れた容姿と先生っぽくないしゃべり方に毛嫌いしてる子もいたけれど、わたし

は好きだった。

取り残された広い部屋の、ぼつんと置かれたソファの背もたれに寄り掛かる。先生とした話——ここがどこなのかや、さっきの男の子のことや、恋愛のことなんかを考えているうちに、段々と眠くなってきた。考えてみれば昨夜はほとんど寝ていない。

お腹が空いてしくしく胃が痛むことより眠気の方がずっと強くて、ついそのまま目を閉じてしまった。

起きてからしばらく、自分がどこにいるのかを思い出せなかった。家じゃないし学校じゃない。どこかに遊びに来ていたわけ……と考え、やっと意識がはつきりする。

「わっ」

慌てて体を起こしたわたしの胸元から、布が滑り落ちる。紫がかった紺色の、裾が長いコートみたいな服で、起毛素材ですべすべのそれを手に取った時声が掛けられた。

「おはよう」

「おはよ……う」

前に座っていた人は、読んでいた本を閉じてテーブルに置く。その当たり前の仕草が、どこかスクリーンの中にいる人のように映った。

「すごい服」

装飾の付いたシャツとベスト、細身のパンツにブーツ。どこか乗馬の格好に似ているその格好を見てうっかり出た失礼なつぶやきに、ユウは自分を見下ろして「俺もそう思う」と笑う。

「変だったら着替えて来るよ」

「うっん、いい。似合ってると思うし」

よく見るとほんのりメイクもしているみたいだ。ここで昨夜までのわたしなら舞台稽古の帰りかなと考えるとところだけど、先生との話はまだ頭の隅に残っている。朝会った時は確か普通のジーンズにTシャツを重ね着していたから、これはここの格好なのかもしれない。

ついじろじろ見てしまった後、ようやく人の家に居座っていることを思い出す。

「寝ちゃってごめんなさい」

テーブルの縁を見ながら言うと、軽い返事が来る。

「いや。ぐっすり寝てたから、起こさない方がいいと思ってほつ
いた。気にしないで」

爆睡していたところを見られていたと知り、頬に熱が上る。目だ
けで見上げるとユウはこちらに笑いかけて来た。

「眠れるくらいリラックスできたならよかった」

リラックスしたというよりも、眠気の限界が来てはったり行つた
の方が近いように思える。でもこの家の人がそう思っているなら訂
正しないでおこう。

そつと窓の方をうかがうと、差し込む陽の光の位置は記憶にある
より大分左の方へ寄っていた。結構な時間寝ていたらしい。

熱さが引かない頬をなでるわたしの目の端に、ユウが着ていたベ
ストの前を開けたのが見えた。

「俺もちよつと寝ようかな。疲れた……」

そうして、ぐったり後ろに頭を仰け反らせる。

「その服、脱いじやった方が楽じゃない？」

「んー……」

思ったままを口を出してもそのままから動く様子はない。黙って
しまったユウをじろじろ見て、自分の膝に掛かったままの上着の持
ち主が誰なのかに気づく。これ、ユウのなんだ。

立ち上がって見つめても、やっぱり目を閉じたまま動かない。ゆ
っくりローテーブルを回り、そばまで近づく。

「もう寝ちゃった？」

あと大股一步という位置まで行っても変化なしなので、お返しに
上着を掛けようとする。と、

「隣に座って」

「えっ？」

目を閉じたままだった人が急に口をきいた。

「って言ったら嫌？」

伸ばせば手が触れ合う距離から、じつと見つめてくる。その淡い
色の目から逃げるように、少し下の方を見ながら関係ないことを訊

ねた。

「わたしと……野上くんって、同じクラスだったの？」

一瞬迷って、ひとまずさっき聞いた名字にくん付けで呼ぶ。ユウは少し間を置いてから答えた。

「そうだよ。三年になつてすぐ、最初の席替えが終わるまで前と後ろだった」

「そうなんだ」

記憶にないことを事実として語られて、違和感がふくらむ。でも、よくよく思い出すとすぐ前に座っていたはずの西さんとは、ほとんど……というよりまったくしゃべった覚えがない。右の席のまーちゃんや左の山下とはあるから、前の席の人とだけ話した記憶がないというのは、ちょっとおかしい。

一年ほど前のことを必死に思い出そうとするわたしの手が、ふいに自分じゃない手に掴まれ、持ったままだった上着が床に落ちる。そらしていた顔を向け直すとユウはじつと見上げてきた。

「同じクラスだったって、先生に聞いた？」

「うん」

うなずき、補足する。

「ここが地球じゃないとかも、野上くんが何か大変なんだってことも」

「そっか」

それだけ言つて、掴んだ時と同じくらい唐突に手を離れた。何なの、一体。

上着を拾おうとしたのをユウに止められ、手持ち無沙汰になったわたしはつい息を吐いてから元座っていた位置に戻ろうとする。とくうともぐうともつかない後引く長い音が鳴った。わたしの、お腹の音だ。

「……………」

うつむけた目の端で、ユウが細かく震えているのが見えた。明らかに笑いをこらえている。

「しょ、しょうがないじゃない！ 朝から何も食べてないんだから！」

何も言われていないのについ言い訳してしまつて、何だかますます恥ずかしくなる。今日起きてから胃に入れたものというと、あの薄いお酒くらいなんだから、減つてない方がおかしい。必死になるわたしを、ひとしきり声を出さずに笑い、ソファから立ち上がる。

「俺さつき食べて来たから腹は減つてないんだよな」

そして、「ちよつと待つてて」と扉の一つに向かった。……お腹が鳴る音つて、ずっと本人にしか聞こえないものだと思つてたんだけど。聞こえた、んだ。

頭を抱えるようにしていたら、すぐにまたユウはこちらへ戻つてきた。ソファの背もたれに拾つた上着を掛けてから言う。

「食べ物用意してくれるって」

「……ありがとう」

好意は、ありがたく受け取つておこうと思う。ソファに座つてうなだれ、ふとあることを思い出して隣に座っているユウへ訊ねた。

「ね、同じ学校だったなら、二年の子らが修学旅行で大変な目にあつた話知つてる？」

ユウは一瞬あさつてへ目をそらし、すぐに「ああ」となる。

「腹下したやつか」

「うん」

ひとつ下の子たちは、修学旅行の行き先がちよつとリッチに外国だった。でもそこでの料理が体に合わなかったのかほとんどの子がお腹を壊してしまい、来年からまた国内旅行へ戻すことになったらしい。なんで外国なんだよとうらやましがっていたわたしたちの学年も、それを知つてみんな黙つてしまつた。

先生の話では、今いるところは国どころか世界が違ふ。最近熱心に料理に使わるオリーブオイルなんかも、元々日本人には合わないと言つし、食べても大丈夫なのかな。

「ね……」

頭に思い浮かべたことを言いかけ、あわてて口をつぐむ。お邪魔している人の家の料理に、ケチつけるようなマネをしたと気づいても、もう遅い。いや……でも、昨夜のこともあるし、ね。

横目でうかがうユウは、わたしの言葉に怒った様子はない。それどころか真面目な顔で考えるようにしてくれている。

「食べ物か。ひまわりとか種なら向こうから持って帰ってるんだけど、炒つてないから食えないよなあ」

おつまみじゃないんだから。んーともむーともつかない声で少しうなり、こちらを見る。

「少なくとも俺や先生は、向こうのもの食べてもなんともなかった。ただ、んー……義理の親みたいなたちが作ったものしか食べなかったから、合わないものは避けてくれてたのかもしれない」

義理の親みたいなたちというのは、先生が言っていた一緒に向こうで暮らしていた人のことなんだろうか。その人たちが作ったもの以外食べていないということは、

「マクドとか食べなかった？」

まさかと思いながらも訊ねると、

「うん、一度も」

あっさりうなずかれた。

「ええ」

高校のあったあの辺りは、放課後どこかへ寄ってしゃべるといって、大抵そばの国道沿いのマクドか、駅前のロッテリアかミストでだった。人付き合いを避けていたのなら、それってかなり特殊だと思っただけ……。

「まあ、俺外国人っぽい顔してたからな。家庭の事情って言えば納得してもらえたよ」

ああ、なるほ、ど？ 牛肉食べられない国の人みたいに説明していたのかな。

それでもつきあいでお店に行くことはあったのか訊ねようと隣を見て、初めてごく当たり前にユウと並んでいることに気づく。そう

してから、慌てて足に力を入れ膝を合わせた。

大きなソファだから、並んでいても肩や手は触れない。でも、知らない（知ってる？）男の子と部屋に二人きり、こんな距離で話すだなんて生まれて初めてのことだ。

意識し出すと途端に止まらなくなつて、緊張に体が硬くなる。さつき、どっちが先にソファへ座つたんだつた？ お腹が鳴つてしまふ前に一緒に座つてとか言われた気がするし、ユウが後だつたつだけ、思い出せない。

悩むうちにドアが鳴り、それがノックの音だと気づいた時にはユウはそちらへ向かつていた。手押しのワゴンで食事を運んできたのは、パフスリーブのシンプルなワンピースに腰から膝くらいまでを覆う白い前掛け、そして白い頭巾をきつちりかぶつた女の人。ユウと何か話してまた出て行くまで、わたしはついさっきまでの悩みも忘れてその人を見つめていた。

閉じたドアをもうしばらく見つめ、ワゴンの下の方から大きな布を出そうとしているユウを振り返る。

「今のつてもしかして」

あれ？ もしかしてあれ？

「メイドだな。なんでそんなに嬉しそうなんだ」

だって、ここ数年変な方面で大人気で、電気街に行くとたいてい居るあれでしょう？

「すつごーい！ 本物！？」

「偽物雇つてどうする」

あつさり言つて、持っていた布をローテーブルへ広げる。ここつて人雇えるような家なんだ……。興奮して少し腰を浮かした時、ようやくユウがしていることに気づく。

「あ、手伝う」

大きな皿をワゴンから下ろそうとしていたユウは、ちらつとこちらを見てまた作業へ戻る。大きな家だけれど、給仕の人なんかはつかないらしい。もしかしたら、明らかに高級な場に不慣れなわたし

へ、気を使ってくれたのかもしれない。

「いいよ。座ってて」

立ち上がるうとした肩をそつと押されて、元の通りにソファへ沈んだ。でもじつと待つのも性に合わず、口を動かす。

「さっきのメイドさん、わたしが知ってるのと何か違った」

よくテレビなんかで見るメイドさんは、ひらひらエプロンとフリル付きの力チューシャを付けているような気がする。そこでようやくこちらを向いたユウは、元の通りわたしの隣に座って言う。

「メグが考えてるのは、十九世紀だか二十世紀だかのイギリスのもんだろ？　うちではあの格好だよ」

「そうなんだ」

ごく当たり前に、使用人がいる場へなじんでいる。お金持ちでごたごたがあつて、というのは本当の本当らしい。さっきのメイドさんを、もう一度、できたら近くで見たいと思っていると、ユウは用意の整ったテーブルの上を示した。

「食わんの？」

ローテーブルの位置は、飲み物を飲むには問題なくても食事をするには少し遠い。それを正直に口にする、一瞬しまったという顔をしてから床のじゅうたんに座る。

「俺しかないし、直接座ろうか」

この環境に慣れているらしいユウがそう言うので、わたしもその隣に正座をした。分厚いじゅうたんの外は木の床で、やわらかいクリーム色の壁は何かを塗ったようなもの。こういういかにも洋風の建物って石作りのイメージがあつたけれど、ここは違うんだろうか。ソファとテーブルの間に座る変な体勢のまま、用意してもらったご飯に手を伸ばす。確か、食中毒は食べてから二十四時間以内に出るんだっけ。

さつき食べたと言っていたのに、ユウもわたしの横で料理をつまんでいる。そして、パンを噛み切れなくて四苦八苦しているわたしにアドバイスをくれる。

「固かったら、スープに浸すと食べれるようになるよ」

その言葉に従ってポタージュっぽいスープに浸すと、確かにいくらかやわらかくなる。テーブルの上にはスプーンだけでナイフとフォークはなく、基本的に手で食べるみたいだ。

こわごわながらも空腹には勝てずに食べ進めて、後は小皿にドライフルーツが残るだけになった。

「結構」

途中で飲み込んだ言葉をユウが引き継ぐ。

「質素？」

「……うん」

硬いパンとポタージュスープ、ピザとパイの中間のようなお肉を載せた料理とドライフルーツ。用意してもらった食事の中身はそれだけだった。

ユウは、わたしが食べないでいるドライフルーツを指でつまんで言う。

「今の日本人って、どの時代の王侯貴族よりもいいもの食べてるんだってさ」

「ふうん」

そういえば、よく飽食の時代だと言っていたっけ。つまんでみたドライフルーツは、砂糖が大量に入ったお菓子に慣れた身には少し味気なかった。

ふと、ユウが口を開く。

「昨夜はごめんな」

わたしを連れて行くこうとしてる人を、ユウは止めようとしてくれていた。それができなかったことを謝っているらしい。

「こっちの言葉がとっさに出なくてさ。朝になって先生と連絡ついて、それでやっと分かってもらえたんだよ」

隣を見ても顔を上げようとしてないユウをしばらく見つめて、またテーブルの方へ顔を戻してから聞く。

「何年あそこに居たの？」

質問を予想していたのか、ユウはほとんど間を置かずに答えた。

「七年ちよつと。学校には周りの人に協力してもらって中学から潜り込んだ。あの時小学校六年分の内容詰め込んだことに比べれば、高校受験は無茶苦茶楽だったよ」

確か、先生は十歳の時に危ない目に遭ったと言っていた。準備期間があつたことを除いたら、二年もない間に文字から全部覚ええないといけなかったんだ。

「そんなこと、よくやったね」

わたしにはとてもできない。少し顔をうつむけると逆にユウがこちらを見たのが分かった。

「俺のために面倒なことをしてくれる、周りの人らに応えたいってずっと思つてたからな。例え強制されなくてもしなきゃいけないことだったんだよ」

その姿勢は、ただの高校生のわたしには少し理解しにくい。だつてわたしたちの年頃は、周りから何かを強いられたら反発するかしぶしぶ受け入れることが多いんだもの。

視線を下けたままにいるわたしに言う。

「メグはよく、明治時代の文学なんて覚えてどうするんだって言うてたけど」

「うん……言つてた」

特に本が好きでもないわたしには、古い文体で書かれた昔の話は苦痛以外の何者でもなかった。テスト勉強の時なんかには、よく愚痴つていた覚えがある。

「俺は全部が異文化だし、いつかはここに帰つて来てもう触れられないことが分かつてたから、なんでも面白かったよ」

顔を上げて見たユウはあわく笑っている。その様子は、同じ歳とは思えないくらい大人っぽく見えた。

「さて」

ユウは指先をワゴンから下ろしてあつたふきんでぬぐい、身を起こして膝立ちになる。テーブルの上を片づけるらしいと知り、わた

しもそれに倣った。

「もういいよな」

「うん。手伝うよ。手伝うからね」

さっきのことがあったために強めに言うと、おかしそうに笑われた。

「あんがと」

元のワゴンに全部を戻し、ソファに座り直してからユウが外へ呼びかける。さっきと同じメイドさんは、ユウが出した何かの指示に従って優雅に見える仕草でワゴンを押して出て行った。ソファに座ったままでその様子を見つめた後、隣のユウに訊ねる。

「自分で持つて行かないの？」

わたしにとつては当然のその疑問に、軽く首を振って言う。

「持つて行ったら駄目なんだよ。高いレストランで、落としたフォークを拾っちゃいけないのと似てる」

先生は、この家は金持ちだと言っていた。お金持ちの知り合いがないから想像でしかないけれど、使用人がいるような家では周囲と区別をつけるためにそういう注意が必要なのかもしれない。

「マナー、みたいなもの？」

ふと思いついた単語で問うと返って来たのは「まあ、近いかな」だった。何か、身の危険がある以前に、日常生活そのものが大変そうだ。それに当たり前に溶け込んでいるユウは、本当に『違う世界の人』なんだろうな。

「じゃあ、そろそろまた行かないと」

わたしがもやもやした思いを口にする前に、ユウは立ち上がってベストの前を締め、さっきの長い上着を取り上げ着込む。すごい格好がますますパワーアップして、ちょっと西欧の王子様っぽくなった。そして、つられて立ち上がったわたしをぎゅっと抱きしめる。

「ひえっ!？」

また後で、の言葉も意識の上を滑る。いい、いきなり何をするのっ?

「あ」

びっくり仰天で見上げるわたしに何か気づいた顔をして、でも言い訳はしないで離れていった。そのまま出て行こうとする背中に慌てて声を掛ける。

「ちよつと待つて！」

足を止めないユウへ、もう一度叫ぶ。

「ここから出ちゃ駄目なの？」

ぴた、と止まり、こちらを振り向いて言う。わたしを見る目がちよつと呆れている。

「そつち？」

「え、いや……」

見つめられて下を向く。ここって外国らしいし、ハグくらいで下手に騒ぐと気に障ると思って突っ込まなかったんだけど、突っ込んで欲しかった？

少しの間お互いに黙りこみ、わたしが先に言いたかったことを口にする。

「ここってテレビも携帯もないし、一人だと時間潰すの大変そうだから、外見てみたいの。……だめ？」

朝からずつとここに居たせいで、さすがに少し飽きてきていた。大きい建物みたいだし、歩き回れたらいい暇つぶしになると思う。ユウはしばらく何を考えているのか分からない静かな顔になった後、淡々と答える。

「暇だったら、そつちの部屋に俺のカバンがあるから。そこに本とかアルバム入ってるよ」

「え」

答えになっでいて、なっでいない。ほかのことを考える前にユウはドアから出て行き、わたしはぽつんと取り残された。

広々とした調度品の少ない部屋を見回して、初めて『今自分がどこにいるのか』を心底から疑問に思う。

突拍子もないことを説明した先生に、どこか得体の知れないあのユウって子。あの人たちが言う『ここは違う世界』という話を、そのまま鵜呑みにしていいんだろうか。

ふと思いつき、さっきから人が一番出入りしているドアの取っ手を引いてみた。わたしの感覚よりも少し上にあるドアノブは、中で硬いものに当たる感触がしてほとんど動かない。部屋を振り返り、あと二つあるうちドアのうち、ユウが示していたのとは反対側にある方も試してみた。……やっぱり開かない。

とぼとぼソファに戻って、そこにへたり込むと自分で自分の両肘を掴む。そうしていないと、震えてしまいそうだった。

わたしに今ある情報は、すべてが人から与えられたものだ。ユウが同級生だったことも、ここが違う世界だとかいうことも。先生は確かに体育の吉川先生だったけれど、あの子とグルということもある。実はここはちゃんと日本で、それっぽい場所とそれっぽい人を用意して、わたしを騙しているだけなんじゃないだろうか。

そんなことして何の意味があるか分からない。でも最近、意味のない犯罪ばかりじゃないの。

自分で確認した馴染みのある場所とは違うという証拠は、空の小さな月くらい。あれも何か特殊な飛行船とかアドバルーンだとか考えれば、人によれば簡単に用意できる。でも、念のためにもう一度見てみようと思った。

窓辺に寄って恐るおそる確かめた空には、朝見た位置から大分右手にあの三日月があった。不思議なことに太陽が月の位置を追い越そうとしていて、まぶしくて長い間は見れずに目線を落とす。右手……たぶん西側に動いているということは、ここは星の北半球だ。

ということとは日本と同じ……。

見下ろした芝生の公園は、やっぱり無人で白く区切られた歩道だけが浮いている。窓は、留め金は外せたものの、開け方が分からなかったので早々に諦めてしまった。第一、地面までかなりの高さがあるこの部屋から、楽に出て行けるとは思えない。

「うわ……」

つい口からうめきがもれる。嫌なことに気づいてしまって、カーテンにすぎるような体勢で何とか体を支えた。

もしかしくなくても、わたしは軟禁されている。昨夜と違う点は、ただ歩き回って周りを見ることができるというだけ。振り向いた先にある部屋の調度品はどれもきれいなのに、閉じ込められていることに気づくと急に怖く思えて来た。

……先生は今夜帰れるようにすると言っていたけれど、本当にそうしてくれるの？ このまま色んな情報を吹きこまれて、閉じ込められ続けるんじゃない。

暗いところへ落ちて行きそうな考えを、頭を振って押しのけ、わたしは唯一開くか試していなかった隣の部屋に向かってみた。ドアノブを引くと少し重いながらもすんなり開き、覗いたそこはクロゼットがいくつかと大きなベッドだけの部屋だった。

薄暗いそこで目を凝らし、真ん中の丸いテーブルの上に大きなボストンバッグを見つけて近寄ってみる。ユウが言っていた、カバンに本があるというのはたぶんこれだ。

中身は、新書や文庫サイズの実用書と、歴史の本がいくつか。一緒にあったプラスチックのファイルにはさんでいたのは、ウェブサイトをプリントアウトした紙で、それもすべて生活の知恵的な内容だったためパラパラ見ただけで元に戻した。

後は……と見て、ボストンの下敷きになっている大きな本に気づく。これ、学校の卒業アルバムだ。

中学と高校、両方のもので、わたしはそれを手に取りソファのある部屋の方へ戻る。隣はカーテンが引かれていて暗かったし、それ

以上に寝室というごくプライベートな場所にはあまり居たくなかった。

朝からずっとへばりついているソファにまた座って、まずは高校と同じ市にある公立中学の名前が付いたアルバムを開く。

「へえ……」

慎重にめくりながらも、知ってる子のかわいい姿を見つけてつい声が出る。中学校の卒業アルバムとか、こんな場所じゃなかったら喜んで見るのにな。特に、写ってる子の目の前で見ると、面白い反応をしてもらえるから楽しい。そう思っていた時、「野上勇樹」という文字の並びを見つけて手を止めた。居た。

三年五組、ほかの子と同じでブレザーを着て映っている。ちょっとびっくりするくらいかわいい顔だけど面影はあるから、本人だと思ふ。

中学の方はそこでやめて、次はわたしも通っていた高校のアルバムの方を見始めた。つい最近、できあがった時に友達と見たそれを、もう一度はつきりした目的を持ちながらめくり出す。

「あ」

確かにわたしと同じ四組に、吉川先生が言っていたユウの名前がある。一番後ろの名簿では、出席番号二十九番とあった。三十番のわたしのすぐ前だ。

全部の写真をくまなく見たけれど、ユウが映っていたのはクラスの集合写真とひとりひとり顔を映していた証明写真みたいなものだけだった。みんなで映っている写真では、凸凹の少ない顔ばかりの中で、ユウの顔は目立って見える。

じいとながめて、大きく息を吐きソファに背を預けた。記憶にない同級生の、向こうにいたという情報はこれだけしかないのかな。ここに携帯があればと強く思う。もし通じるなら間違いなく日本だし、アドレス帳にユウの名前があったかもしれない。そうしたら、あの子が誰なのかもっとちゃんとしたことが分かりそうなのに。

ついまた息を吐いて、テーブルに置いていたアルバムを膝に載せ

る。写真を見ようとしても、目はその上を素通りして行つた。

昨夜、ここへ来る前は確かにクラスメイトとカラオケ屋にいた。あそこでトイレから戻る時、一体何をしたんだろう。廊下を歩いていて気がついたら最初のあの部屋にいて、その間は眠くなったりも転んだりもしていないのに。

ぱらりと分厚い紙を繰り、手を止める。

違う。わたしは自分以外誰も居ない廊下を、足音を立てないようにそつと歩いていた。なんで、どうして？ …… ああそつか、廊下で何かを見つけて、驚かせようとこつそり近寄つたんだ。

その対象が何なのか、どれだけががんばっても思いだせない。人がそうじゃないものなのかすらも。ということは、それがあのユウ？ 考えれば考えるだけすべてが分からなくなりそうで、一度まぶたを閉じて目を落着かせるとアルバムを持って立ち上がる。何か、頭をあまり使わずに読めそうな本を探そう。

薄暗い隣の部屋で見つけた、地上から見た夜空の写真がたくさん載っているカラーの本を持って、元のソファに戻った。選んでしまつたのは、写真がきれいなこと以外に、先生の違う星という言葉が頭にあつたからかもしれない。

写真を全部見終わる、もう一度最初から細かい文字の解説もすべて読んで、本をテーブルに置く。いつの間にか窓からはほとんど陽が差し込まなくなっていて、そのわずかな光もほんのりオレンジになつている。もう大分夕方に近いらしい。

さて。

一番人が出入りしていたドアが、押しても引いても横にスライドさせようとしても、忍者屋敷の仕掛を思い出して下の方を押してみても動かないのを確認してから、窓辺へ行く。

こつちも、押しても引いてもカタカタいうだけ。音が鳴るということとは嵌め殺しではないはずだから、

「あ」

もしかして。

ふと気づいて、上へスライドさせてみると窓は軽い手ごたえであつさり動いた。

「開いたーっ！」

閉め切っていた部屋へ外の空気が流れ込むのを感じて、そつと息を吐き出す。風は五月に吹くもののように、ゆるやかで暖かい。三月の初めでこれほどぬくかったら何か予報も出ているはずなのに、ニュースや噂でそんな話を聞いた覚えはなかった。

気持ちのいい風に目を細め、改めて外を見下ろした。下への高さからすると、部屋の天井が高いことを入れてもここはたぶん建物の三階だ。外の芝生の向こうは林があり、所々ぽつかりと空白のある緑のその彼方で、白っぽいものが長々と細く横たわっていた。

改めて見上げた空にはやっぱり小さな三日月。それにこの暖かい風。どちらも昨日までいた場所ではありえないこと、だと思う。

窓辺から離れるように一歩下がり、ひとつ深呼吸をする。

色々確認してみて少し心が落ち着いていた。周りは知らない人ばかり、知っている人も学校の先生なんて隔たりのある相手だったから、緊張していたのかもしれない。

とりあえず今のわたしには、先生とユウの言葉が本当だと信じるしかない。ここがユウに関係している場所というのは間違いないから、大人しくしておいた方が変な目には遭わずに済む、はず。

と、

「メグ？」

わたしを呼ぶ声に慌てて振り返る。いつ開けたのか、ユウが閉まったドアの前に立っていた。前に部屋を出て行った時と同じ格好をしていて、その上着を脱ぎながらこちらに歩いて来る。

「おかえり」

言いつつつい正面から逃げるように動いてしまい、それが気に障ったのかユウは途中で立ち止まった。少し顔を伏せて見上げるわたしと後ろの窓を見比べて、何かうなつてから残りの距離を詰める。

「閉じ込めるようなこととして悪かった。日本語分かる人間いないし、

ここで迷ったらやばいと思ったんだよ」

「ような、じゃなくてまんま閉じ込めてたって、気づいてる？ 窓の横にまとめられているカーテンへ寄り添うように立って、反対のカーテンのそばにいるこちらを見る。」

「もし夜中までに見つからなかったら、しばらく帰れないところだったしさ」

その言葉に、わたしは伏せ気味にしていた顔を上げた。

「帰してくれるの？」

見上げると驚いたような顔をされる。

「帰りたくないのか？」

「ううん」

もしかしたら帰してくれないかも思っていた、とはさすがに口に出せない。ユウはちょっと肩の力を抜いて、ソファの方へ向かった。話を変えるためか、少し大げさな調子で言う。

「やっとフリーだよ。つってもまた晚メシの時は行かないと駄目だけど。なんか、夜までにしておきたいことってある？」

聞かれ、散々迷ってから短く答える。

「特にないよ」

本当はともお風呂に入りたい。ここは空気が乾燥しているのかべたべたはしていないけれど、昨日の夕方焼肉に行く前にざっとシャワーを浴びてそれっきりなので気になっていた。せめてここにいるのが同性の先生だったらまだ言い出せたのに、今そばにいるのは異性のユウだ。

うつむくふりをして服のにおいをかいでいると、ユウから提案して来た。

「もしなんだったら、服洗ってもらう？ 昨日からずっとそれだろ」

「えっ」

「おいかいでるってばれた？ いやそれ以上に。」

「脱ぐの？」

「ぼそぼそつぶやいたからか聞こえなかったらしく、ユウはなんで

もないことのように続ける。

「洗濯乾燥機みたいなもんあるからすぐに乾くし、風呂も用意できるよ」

一方的に言ってドアの方へ歩いて行ってしまふ。

「ちよつと待っ！」

あわあわしながら止めた時には、部屋の外にいる人と何か話していた。部屋の中ほどまで近づいたわたしを振り返って言う。

「お湯だけならすぐ用意できるって。どうする？」

もしせつけんも使えるなら入りたい。でも。

「あの、お風呂なんて借りていいの？」

人の家だし、そばにいるのはよく知らないはずの相手だし。振り向いたユウから目をそらすようにしていると、ようやく何かに気づいたように頭へ手をやった。

「そっか。ごめん、癖で」

何の癖？ お風呂に入りたくなったら入る、そんな状況が早々あるようにも思えない。修学旅行とか、どこかで寝泊まりとか……？ 考えてみて、その場でよろよろ後ろに下がった。いや、でも。その、まさか？

混乱するわたしを置いて話をしていたユウは、終わったのかドアを閉めてこちらに向き直った。

「入るにしても入らないにしても、風呂の用意してくれるらしい。メグが入らないなら俺が入るよ」

「う……うん」

言っただけに踏み出すユウから逃げるように、また後ろへ下がる。ユウは一瞬足を止め、そのままわたしを避けるように壁際を歩いてソファまで戻った。その姿を見つめて考える。

お昼のハグや今の言葉は、驚きはしても気持ち悪いとかそんな感覚は湧かなかった。その理由は、下心なんてないような話ぶりにもあるのだろうけど。

「あの」

きつかけの一言だけを口にして、その先を言わないわたしをユウは黙って待ってくれる。そのおかげで、なんとか聞きたいことを言えた。

「わたしとユウって、向こうで仲よかった？」

頭には一方的な情報しかなくても、この人とのやり取りにはなじみがあるように思えるし、正面切って話しているとなぜか疑おうとする気持ちが小さくなってしまふ。それがどうしてなのかを考えたら、前に仲がよかったからという理由がしっくり当てはまる気がした。

目をそらさないようにがんばって見つめるわたしを、まっすぐ見返して言う。

「よく話してはいた」

その遠まわしな返事にピンと来る。もう、何かわたしに知らせたくないことがある時にこういう言い方をする事には気づいていた。これは予想通りかもしれない。

「あのね。もし間違ってたらあれなんだけど……」

ついためらって半端なところで言葉を止めてしまふ。ええい、ここまで来たんだ、言ってしまうえ！

「カレカノだったりした？」

勢いをつけて一気に言い、手をぎゅっと前で組み合わせる。男子と女子で仲がよくて、くつつくことに違和感がないということだ。思いついたんだけど、これで外れてたら自意識過剰の変な子ってことになるな。

いつまでも返事が来ないことに顔を伏せた時、「そうだよ」とうなるような返事が来た。当たった……？

「本当に？」

「うん」

改めて聞くと今度はすんなり肯定した。力が抜けて、ついその場へへたり込む。

今ある記憶では、彼氏いない暦が年齢と同じだ。じゃあ、初めて

の彼氏がこのユウで、その記憶が全部すっ飛んでしまってる、の？
本当に本当なら、

「ひどい」

あまりのことに出た言葉へ、ユウは「ごめん」と返して来る。こんなことで謝らないで欲しい。

どうして付き合っていたのか。わたしはこのユウのどこが好きだったのか。その辺りのことが、どうしても思い出せない。それはそうだ、この人自身が忘れさせてしまってるのだから。

「なんで……」

そう思うことが多すぎて、自分でも何に對してつぶやいたのか分からなかった。ユウは黙ったままで何も話しかけてこない。

いつも周りの子には年上の人が好きと言っていたから、歳より大人びているユウに惹かれたというのは納得ができる。でも、当然そんなのじゃ気持ちは収まらなかった。

しばらく考え込んで、決める。もうこれは、本人に聞いてしまおう。どんなきっかけでどうして付き合っていたのか。そして……別れはいつだったのかを。

顔を上げ、正面切って質問してもいいかを問うと、ユウは何も言わずにうなずいてくれた。一度気持ちを落ち着かせるために大きく息を吐いて、ソファまで戻る。ベストも脱いでしまいシャツとズボンだけになった人と、正面から向かい合う位置に座った。

決意したものの、やっぱりなかなか言い出せない。聞きたいことを頭の中でまとめてからようやく口を開く。

「わたしとユウって、いつ付き合いだしたの？」

「夏休みの前」

「きっかけは？」

ちよつと間があつて、さつきと同じように短く答える。

「俺から告白して」

嘘だ、と思う。きつとわたしから言っただ。必死に頭の中を掘り起こすと、小学校の時からずっと一緒に友達に、何かすごいハイテンションでメールを出した記憶が出てくる。もしかしたらこれかもしれない。

表情を崩さないユウから少し目をそらしてさらに訊ねた。

「デートってしてた？」

「時々、勉強ついでになら」

確か、ほかの学年よりも短い夏休みの間や二学期の放課後に、一人で図書館へばかり行っていた。本は読まないし、自分の部屋にもクーラーがあるから涼む目的で行くことはない。じゃあこれはユウと行っていたんだ。

ひとつ息を吐きユウの方を見る。わたしが何かを聞く時と同じ、考えていることが分かりにくい顔でこちらを見ていた。

「マクドとかって行ってた？」

カップルで行くと言えば、で聞いたけれど、

「行ってたよ。俺はいつも何も頼まないから、最初の頃はメグに不

思議がられてた」

なんて返って来て、昼間に聞いたことを思い出す。そういえば家
の人が作ったもの以外は食べないようにしていたんだっけ。

「無理やり連れて行つてたのならごめんなさい」

「そんなしょっちゅうじゃなかったからいいよ。メグも俺が図書館
行くのに付き合ってくれてたし、お互い様だ」

そう言うからには好きではなかったみたいだ。ああいう店は大概
騒がしいから、本が好きなユウには合わなかったんだと思う。
でも、わたしが正面から図書館いやと言うことがあっても、この人
はファーストフード店がいやだなんて言わなかったんだろうな。な
んとなく分かる。

そんなユウと、デートはしていた。そして夏休みからしばらく付
き合ってもいた。けど、色んなことに興味津々の高校生で、当然な
がらわたしもそういうことに興味はある訳で。

……何か恋人らしい発展はあったの、かな。

「それで……、あの、その」

さすがにこれは目をそらし、自分の膝に視線を落とす。

「き……」

最初のその一音を口にはしたものの、なかなか続きが言えない。
恋人同士がするようなことをしていたのか聞きたいだけなのに。で
も、ま、知らなくてもいいか。

「ごめん、なんでも」

言いかけるわたしに、ユウの声が降ってきた。

「キスは夏休みの最後の日、セックスはクリスマススイブが最初だっ
たよ」

「わあああああっ!？」

言い切った! この人言い切った! してるのになってちよつと
気になっただけなのに平然と言っちゃった!？

頭を抱え、身を縮めて叫ぶ。

「せ……せめてえっちとか!」

顔から火が出そうだ。嘘かそうじゃないか、問いただす余裕なんて当然ない。雑誌のモノクロページで特集されているような、あれやこれやが実はもう済んでいるだなんて、そんな自覚はまったくない。なんてこと……。

熱い頬を両手で押さえるわたしに、相変わらず静かな調子のユウの声が届く。

「なんでエッチって言うんだろ。変態の頭文字だって説もあるけど」

お願いだからしみじみ不思議がらないで。

ほつぺたを押す手にぐいぐい力を入れて、なんとか気持ちを落ち着けようとする。頭を伏せたまま目線だけを上げると、ユウは顔を窓の方に向けていた。そちらを見ているのではなく、わたしが顔を上げて目が合わないようにしてくれている。

その気遣いに立ち直り、今言われたクリスマススイブのことを振り返る。確か一番仲のいい友達と二人、お互いの家に泊まることにして、誰かの住んでいるアパートへ出かけたはずだ。じゃあ、これがそう、なんだ。

気を取り直して体を起こし、顔だけは伏せたまま今思いつく限りで最後に残った疑問を口にした。

「それで、いつまで付き合ってたの？」

長い間があった。テーブル越しにユウの膝が見えるくらいまで顔を上げ、小さく訊ねる。

「まだ別れてない？」

「言葉では言っていないな」

その声は平坦だった。そっと見たユウは、さっきまでのわたしのようになを向いている。

相手がすべてを忘れてしまうなら別れは切り出さないでおこうと、そういうことだったんだろうか。確かに今その話を聞いても、悲しいなんていう気持ちは湧いてこない。

顔を上げ、まっすぐ見つめてくるユウから、今度は目をそらさな

かった。

「卒業式の日の夜十二時に帰るって決めたから、ギリギリまで一緒に居たくてカラオケ屋まで行ったんだ。まさか、こんなことになるって思ってたけど」

最後はテンション低く、ぼそぼそつぶやく。一緒にいたかったのはわたしと？　だとしたら、とても嬉しいはずのことを言われている。

気持ちに何の変化もないことを、空しく思いながら言う。

「これって、わたしが勝手について来たんだよね」

返事はない。けれど、昨夜のあの感じからほとんど間違いはないと思っていた。

「ややこしいことにしてごめんなさい」

「いいや。あんなところで帰還ルート開かせた俺が悪い」

つい謝るわたしに、向こうも沈んだ口調で言った。まさか、カラオケ屋の隅で違う世界へのゲートを開こうとしているなんて、普通は思わないよね。

「でもほら、驚かせようとしてこっそり近づいてたのはこっちだし」「それで後ろにいたのか」

納得したような様子のユウにうなずき、あることを思い出して声をあげる。

「どうした？」

「わたし、カラオケ屋のお金払ってない……」

今の話とは全然関係がない、でもとてつもなくリアルな問題だ。財布も携帯も向こうだから大丈夫だと思うけど、お金払いたくなくて逃げたとか思われていたらどうしよう。高校生活の一番最後に、とんでもない悪印象を与えてしまったかもしれない。

不安がるわたしとは対照的に、同じく途中で抜けたはずのユウは落ち着いている。

「俺、途中で帰るからって先とりでんに渡して来たよ」

とりでんはうちのクラス委員のあだ名だ。名字がトリイで、電車

好きの鉄ちゃんだからとりでん。知っているあだ名がでてきて強い親近感が湧く。

「たぶん誰かが立て替えてくれてるって。それよりも行方不明になってる方がやばいかもしれない」

「……うん」

確かにそうだ。お願いだから、変な騒ぎにはなっていないませんように。ついお祈りするように胸の前で手を組んだわたしへ、ユウが言う。

「俺の家の前に出るよう指示しとくから、そこで『野上』ってこ訪ねて。向こうに帰ったらすぐ電話使えるように言っとくよ」

その申し出にうなずき、ちよっと首を傾げた。

「ユウの家ってまだ向こうにあるの？」

向こうでどうやって住む家を得たのかは置いて、どうしてもまだ家があるんだろう。

「うん。先生が今年の一月に帰って来てて、次が俺、あと俺の育ての親っぽい人たちがまだしばらく向こうに居る予定」

「なんで？」

ユウのために行っていたんだったら、皆もうこっちに戻ってきてもいいんじゃないの？ わたしのその疑問にユウはゆるく笑った。

「世話になった人がいるから、恩返しとかしないと」

「……そっか」

協力者がいたからこそ、異世界暮らしが可能だったらしい。片田舎で、外国人つてだけで色眼鏡で見られる辺りだから大変だっただろうな。

ユウをまつすぐに見て、さっき頭の中でぐるぐる考えていたことを話し始める。

「わたし、ついさっきまで、ユウが言ってることって全部嘘じゃないかって疑ってた。なんか感覚が覚えてたけど頭では全部忘れてるし、いきなりこんなところに閉じ込めるし」

驚いたようにしていたユウは、わたしの言葉を受けて開き気味に

していた目を伏せる。

「部屋から出ないようにって言ってたのはごめん。もう俺と知り合いつてみんな知ってるから、表歩かせたくなくて。ここ、まだ信用していいと思える人間がいらないんだよ」

長年居なくなっていたのだから、それは分かる。でも、

「先生は？」

おばさんだつて言っていたし、ずっと一緒に暮らしていたからあの人は、と思ったのに。

「完全には信用してない」

ごくあつさりしたその返事に今度はわたしが目を見開く。ユウはびつくりしているこちらを見て、怖く感じてしまう薄い笑いを浮かべた。

「おかしな話だろ？ この家代々こんな感じなんだ」

昼ドラやサスペンスよりひどいような。力を抜いたように背もたれへ寄りかかって、ゆっくりと言う。

「俺、何が何でも父親の跡継ぎたいって訳じゃないんだよ。でも周りの人間がこうまでしてくれたんだから、逃げるなんてことは自分で許せないんだ」

何か、自分に言い聞かせているようにも聞こえる。確かさつきも、期待してくれる人には応えないといけないと言っていたような気がする。それだったら、ユウ自身の意志はどこにあるんだろう。

視線を伏せ気味にして、顔の作りとは関係なく姿がきれいに見える人に問いかける。

「まだ向こうに居たかった？」

危ないらしいここから離れ、ごく普通の男子高校生として過ごしていたらしいユウ。友達もいただろうし、一応、わたしなんていう彼女もいた。そのまま向こうで暮らしたいとは思わなかったのかな。そんなわたしの問いには首を振られてしまった。

「こっちで、一般市民として暮らしたい」

その言葉から、ユウにとって向こうはよその国でしかないという

ことが分かって、ちよつとショックを受けた。わたしはあそこ、好きなんだけどな。

寂しいと思う気持ちを追い払い、気を取り直して違うことを訊ねる。

「そついえば何の跡継ぎ？」

「ごまかされるかとも思つたけど、あつさり答えてくれた。

「大きな組織の代表。まあ社長と思つてくれれば」

社長、か。何か格好や建物から王さま・王子さまなんて言葉がチラつく。……まさかね。

その時、どちらも黙るタイミングを見計らつたようにドアが鳴つた。その途端に、どこかしんみりしていた空気を払い、ソファから立ち上がつてわたしに言う。

「ごめん、ちよつと待つてて」

「うん」

ユウの変わり身の早さに拍子抜けしながらも、座つたままで待つ。どうやらさつき頼んでいたお風呂の用意ができたらしく、薄く扉を開いたままこちらを振り返る。

「ちゃんとした風呂用意したつてさ。それで時間かつたんだな」
確かに、すぐと言つていた割には結構経つてゐたみたいだ。

「手伝うかつて聞いてるけど、いらんよな？」

少し笑いを含んだ声にぶんぶん首を振る。そこに立っていたメイドさんも笑つたようで、ユウがまた何かを言つてドアは閉まつた。

「じゃ、行くか」

ユウの案内で隣の寝室へ入り、「そつちだから」と更に右手の方にあるドアを示して本人はクロゼットに向かつた。「そつち」は今まで見た二部屋に比べるとかなり小さい、でも十畳間くらいはある部屋で、真ん中に白い陶器のバスタブが置いてあつた。衝立があるところを見るとここで脱いでここで入つてしまふらしい。

これまでと違って板じゃない、石がむき出しの床には、あちこちに生けた花が置いてあつた。バスタブにも花びらがたくさん浮いて

いて、一瞬どこの温泉地かと思う。

「またえらくファンシーな……」

ユウがつぶやいているところを見るとこれがこちらの当たり前ではないらしい。こんな演出はわたしが入りたいって言ったから？

「廊下に出ないんだね」

気を取り直し、きよろきよろ見回すわたしに驚くことを言う。

「廊下はないよ。昔の日本家屋と同じで、部屋と部屋が連なって建物になってる」

「へえ」

その作りは確かに、案内がなかったら迷いそうだ。いくつもあるドアを見比べていると、植物のつるを編んだカゴを手渡された。

「これせっけんタオル。で、その白いいのは俺の部屋にあった寝巻き。未使用だからもしよかったら使って」

「ありがとう」

受け取ったものの中身は、クリーム色の固形せっけんにタオルというより手ぬぐいのようなもの、それときれいに畳んである白い服抱えたそれとバスタブとを見比べる。

「ゆつくり体を休めるんじゃないくて、汚れ落とすためだけのものだから。水遊び感覚でいいと思うよ」

どうやって入るか、悩んでいるのがばれてしまった。水遊び、か。「じゃ、俺隣にいるから」

言ってユウはさっさと出て行き、独りになったことで少しほっとしていることに気づく。今日はずっと、頭で考えることと感じることとがちぐはぐで気持ち悪い。

扉が閉まるのを確認した後、ほぼ丸一日着ていた服を脱ぎ始めた。それを下着類だけ別にして大きなカゴにまとめてから、慎重にバスタブへよじ上り、そつと足から浸かりに行く。

手でかき混ぜたり、花びらをすくってみたりしたけれど、初めての西洋風のお風呂はあまり入った気にならなかった。やっぱり、日本ののんびり浸かるあれがいい。

甘い香りが漂うぬるいお湯の中で髪も体も洗って、家で入る時よりもかなり早くあがる。ブラだけ付けた上からカゴにあった白い服を着て、ドアをそっと叩いた。

「ユウ」

覗いた隣の部屋はカーテンが開けられていて、ユウがまた本を読んでいた。本当に好きなんだ。

わたしの声に本を置き、椅子に座ったままでこちらを振り向く。

「もういいの？」

「うん。これゆっくりできない」

顔だけ出して答えるわたしにゆるい笑みが返って来る。

「そか」

さっぱりしたいという目的は達成できているし、その点で不満はない。

「あとどうしたらいいの？」

お風呂に浮かんでいた花は本物だった。使い捨てだとしたら、わたしの感覚でもぜいたくなことをしている。そんなお風呂を振り向きながら聞くと、

「時間がある程度経ったら片づけに来てくれるよ」

言って立ち上がるとこつちに近寄ってきた。今来られるとまずい。

「ああつ、ちよつと待って！」

思わず出した大声に足を止めたユウへ、顔をうつむけたまま言う。

「ごめん、今……」

ノーパンだから、というのは向こうに聞こえなかったかもしれない。けれどユウはそれ以上は近寄らないままで聞いてきた。

「今まで着てた服どうする？ さっき言ったかもしれないけど、乾燥機みたいなのあるから今から洗ってもすぐ乾くよ」

「本当？」

じゃあ、お願いしてしまおうかな。いやでも、下着まで頼んでしまうのは気が引ける。でもでも、ずっと同じのはいてるとかゆくなるし……。

「洗えないものがあつたらあらかじめ避けといて」

はつきりした答えを言う前に、ユウはソファのある部屋へ行ってしまう。戻ってくるのを待つ間、考えに考えてニットのカーディガン以外の全部を洗ってもらうことにした。日本には旅の恥はかき捨てという言葉があるし、たかがわたしの下着くらい印象に残らないはずだ。

かつこ悪いと思いながらも白い服の上からニットを着込んだ時、どこかへ行っていたユウが戻ってきた。わたしが選り分けた洗う物のカゴを拾うとドアのひとつに向かい、誰かと話してからまたこちらへ近寄ってくる。

今ドアの隙間から服を受け取っていた人、昨夜わたしを引きずったあのおばさんだったような……。似ている人だと思っておこう。促されるまま寝室を通り抜け、ソファのある部屋へ戻ってから訊ねられる。

「服が乾くまで本でも読んどく？」

さつき見た時にあまり興味を惹かれる内容のものがなかったため、首を振る。ユウは自分の提案を断られたことを気にした様子もなく、「じゃ、髪乾かす？」と頭にかけていたタオルを取った。

男の子からそんなことを言われるとは思っていなくて、目を見開く。まるで小さい子みたいだ。驚いているわたしに気づいたユウは、今の動きをリバーズするようにタオルを戻した。そのままソファへ座りまだぼうつとしているわたしを見る。

「前に髪触られるの好きって言ってたから、手伝おうかと思っただけ。変に思ったならごめん」

確かに好きだけど、あまり人には言ったことがない、はず。少し考えてから、頭の上のタオルを手に取りソファに近づいた。テーブルの方を見ていたユウは、わたしとタオルをちらり見比べる。

記憶にないことは知らないでおきたいのに、やっぱり無理だ。

「乾かすの、お願いしていい？」

変な頼みごとをするわたしに、ユウはかすかに笑ったようだった。

水気を拭き取り、やわらかい手つきで髪を梳かれていると段々ヘアサロンにいる気分になってくる。卒業式が終わったらパーマを当てようと思っていた髪は肩より少し長いくらいで、ドライヤーなしに乾かすのはかなりめんどくさい。

ソファにななめを向いて座り、背中を向けているユウに訊ねる。

「お客さんどんな風にしますかー、とか言わないの？」

プールの授業の後にやっていたことを思い出しての問いに、ぷつと笑われた。

「男子はこういうことやらない？」

「ああごめん。前もそれ言われたから」

「え」

ということとは、やっぱり前にもこうしたことがあるんだ。わたしって言うことワンパターンなんだ……。いや、それよりも。

「もしかして、わたしとユウでお風呂って入ったことあるの？」

お付き合ひしていたようだし一線も超えていたらいいことから、つい聞いてしまった。しばらくの間があって、ユウはぼそぼそした声で答える。

「ラブホ行った時に、まあ」

「ブホ!？」

そんなところ、行つてたの!？ わたしは当然実家住まいだしユウも人と暮らしていたのなら、お付き合ひの最中にはそういう場所にも縁があるだろうけど……!

抱えようとした頭が一瞬後ろに引かれ、髪を持たれたままだったことに気づく。また元の体勢に戻ってから手で顔を覆って、大きく息をついた。

ユウはあまり気にしていない様子で手を動かし続ける。

「シャワーの後にこうしたりはしたけど、一緒に入ったのはそのラ

ブホ行つた一回だけ。俺も明るいところで裸見られるのいやだったし」

耳の後ろの毛をすくわれる時に手が触れて、くすぐったさに少し体がはねた。むずむずして頭を動かしたいのを我慢しながら聞く。

「なんで？」

「一身上の都合」

何か、異世界人が、偉い家の人なりのものがあつたりしたんだろうか。手ぐしで上の方から梳かされ、まとめて軽く引つ張られる動きに反抗し前のめりになりながら、こめかみの辺りから落ちた自分の髪を手でいじる。

「偉い家の人つてことは、許嫁とかいるんだよね」

「いるよ」

ふと思いついた問い掛けには一切のためらいなく答えられた。じやあわたしとは、所詮期間限定の仲と割り切っていたんだろうか。

「先生が結婚相手に愛情持てなくても全然平気ーとか言つてたけど、ユウも？」

「俺もそうできたらと思う。ヘアゴムが何か持つてる？」

今度は少し回答をばやかして、全然関係ないことを訊ねて来た。

「持つてない」

「じゃあ無理か」

言つた後で後頭部にあつた束縛感がゆるみ、髪が両肩に落ちた。何か引つ張られていると思つたらくくううとしていたらしい。

重たい黒一色の髪に触れて、ほとんど乾いているそれに指を巻きつける。パーマだけじゃなくてカラーもやりたいんだけど、どっちを優先しよう……。

「離れることはきちんと分かつてたし、平気なはずだったんだけどな」

ふいにそんな声が聞こえ、後ろからそつと頬を撫でられた。

「ひえっ？」

振り向く前に、こちらの体に直接触れないように、けれど逃げら

れないよう前へ腕が回される。

「今現在愛情持てそうな相手なら、いないこともない」

「え……」

全然違うことを考えていたせいで、小さくつぶやくようなその言葉に頭が追いつかない。

「未練がましくなること言うなよ」

そこまで聞いてようやくさっき自分が言ったことを思い出した。

許婚がいて、好きじゃない相手でも平気かどうかって、聞いたような。どこも触れられていないのに指一本動かせないわたしへ、少し脅すような響きの声がささやかれる。

「メグが向こうに戻るかどうか、俺次第ってこと分かってる？」

「分かって、る」

そうだ。もしユウが一言「帰さなくていい」と言ったら、今夜用意をしているという人たちはきつとやめてしまう。だって、この人たちはみんな、わたしのためじゃなくてユウのために動いているんだもの。

知らないはずの相手に対する怖さとてもよく知っている相手への親しみと、両方がわたしの中にあって、直接話している時はつい怖さを忘れていた。わたしとユウの関係には一応の納得が行ったけれど、ここがどこかまったく知らない場所だということは、変わりが無いことなのに。

顔を見れない相手に威圧感じみたものを感じ、身をこわばらせているとユウは「ごめん」と腕を解いた。ソファの端までじりじり動き、振り向いた相手には特に不機嫌そうな様子はなかった。

その顔をしばらく見つめ、目をそらす。その冷静さに何だかイラつくものがあつた。

「あのね。これはただの確認だから。そっちの気持ち煽るとかじゃないからね？」

言いながら、ソファを立って向かい側に回る。逃げたわたしを見てほんの少し不思議そうにするユウに、テーブルをはさんでななめ

前から問いかけた。

「なんでわたしと付き合ってたの？」

しばらく黙り、ぼそつと言う。

「殴られる用意した方がいいかな」

「殴られるような理由なの？」

正直に言えば怒られる理由って、……まさか、体が目当てだったとか？

でもわたしそんなに大した体はしてないし、ちょっとだけ胸は大きめかなって思ってるけどその分ほかのところにもお肉ついてるし、でももし女の子と付き合うことだけが目的ならそんなことはどうでもいいはずだし。うう、さっぱり分からない。

座ったソファの上で体を硬くするわたしに、ユウは短く言った。

「高校最後の年だったから」

後に何か続くのかと思ったら、それで終わりらしかった。

「それだけ？」

「それだけ」

しばらく呆然としてから、ソファにぐったり背を預けた。何も言えないわたしに、ユウは少し意外そうな顔をする。

「怒らないんだな」

「そんな気も湧いて来ない」

正直に答えて肩を落とす。高校の思い出を作るためって、わたしは修学旅行か。

「もしかして、付き合えるなら誰でもよかった？」

うつむいての問いに、しばらく間を置いてから答えが返って来る。「三年になってからよく話していたメグだから、だよ。これが初対面の子に『いつも見てました』とか言われても答えなかった」

それは、友達として好きだった延長になるんじゃない。それでもきつと、ユウはわたしを好きであるように振る舞ってくれていたはず。そこだけ思えば、恵まれていたんじゃない、かな。

知る前にも増して複雑な気分になるわたしの頭に、更に疑問が湧

かべていた。ティーン向けの漫画では、女の子の方が怖がって男の子が大丈夫って言うシチュエーションが多いのに。

「どうして？」

疑問を素直に口にとするとゆるく笑ったままで言う。

「そっちから見たら俺は宇宙人だから」

「あ……」

そして向こうから見たらわたしは宇宙人だ。言い出した当時のわたしは当然知らなかったはずだけど、ユウは知っていたはずで。よくOKしたな。

「もし、お腹にもうひとつ口でもあったらどうしてたの？」

どんな妖怪と頭の中でつつこみを入れながらの問いに、あけっぴるげに言う。

「エロ本読んだ限りでは違いがないようだったから、大丈夫だろうとは思ってた。そもそも授業で水泳やってたし」

あ、そっか。男子は少なくとも上半身裸だ。一瞬納得してから、かけらも恥じらいのない顔を横目で見る。

「エッチな本読んだ」

「グラビア誌とかはな。あと中学の時にエロビデオ鑑賞会とかもやった」

ひょうひょうと答える様子から目をそむけたままで問う。

「こういう話題平気？」

そういう本読んでることとか、とにかく周りに知られないようにするものだと思うんだけど。一拍置いてから、当たり前のように言う。

「恥ずかしかった方が余計恥ずかしいだろ？」

「そ……そうかな」

言われてみればそうかもしれない。今度は親指同士をぐるぐる回しているとユウが何かうなるような声を出した。

「ガキの頃からとにかく子どもは残せって言われてたから、その辺ずれてるみたいなんだよなあ」

小さい子どもにそんなこと言い続けるってどんな環境なの、と思
い気づく。

「この家の決まり？」

「そう」

血統が重んじられるお金持ちな家ならではの、か。顔を向けたわた
しを、ユウはどこか探るように見ながら更に言う。

「ついでに言うなら愛人困っても誰も文句は言わないんだよなあ」

「うわ、昼ドラ」

軽く引いたわたしを笑い、「さて」と立ち上がる。……あれ？

「もう洗濯終わってると思うから持ってきてもらうか」

そして部屋の端にある棚の方へ向かうユウを見送って、前にある
ローテーブルの端に目を落とした。そうして取り残されたソファで、
ぐるぐるとさっきの言葉を反すうする。誰にも文句を言われないう
て、わざわざわたしに言ったということは……？

頭を軽く振った時、わたし以外誰もいないはずなの部屋で話し声
が聞こえて、音の方を振り返る。壁際でひとりしゃべるユウに、確
かに違う声が応えていた。

何してるんだろう、とそつと近寄り覗くと、ユウは棚の上に置い
た丸い石のようなものに手を触れさせていた。半透明のそれは、ア
クセサリーショップにあるような天然石の飾りみたいに見える。

「それって？」

「館内無線」

何もしゃべらなくなるまで待つてから訊ねたわたしに、すぐに分
かりやすい言葉が返って来た。聞かれたらそう答えるように用意し
ていた感じがする。

それからソファへ座り、なんとなく学校のことなんかを話しながら
待つうちに、ドアが叩かれた。わたしの服を持ってきてくれたのは
昨夜のあのおばさんで、お風呂に入ったすぐ後のことが目の錯覚
じゃなかったと知る。

「あの人って」

ドアが閉まるまで待つてから服を持って戻ってくるユウをうかがう。昨夜わたしが連れて行かれたことは覚えているだろうに、警戒らしいことはしていない。

「うちの」

そこで止まり、しばらく黙つてからややふわふわした感じで言う。
「特殊技術担当？」

いい例えが思いつかないらしい様子から察するに、先生が言つていた『魔法』を扱う専門の人なのかもしれない。だったら、ユウが戻つてきたあの場にいたことにも納得がいく。わたしを裸にしたことには納得いかないけど！

ちよつとむくれていると畳である服を渡された。すっかり乾き、柔軟材を入れたようにやわらかくなっている。

「着替えるなら隣使つて」

「うん。ありがとう」

ノーパンでうろろろし続けるのもなんなので、隣の寢室を借りてさつさと着替えることにした。きれいになった上にもいいにおいがしている自分の服を着て、借りていた白い服を畳んでソファのある部屋へ戻る。ソファの座るところじゃなく横へ立っていたユウは、きちんと上着を着た格好でこっちに目を向けた。

「ちよつと早めだけどメシ行つて来る。メグも何か食べたいなら持つて来させるよ。どうする？」

言われてみればお腹が空いている。ろくに動いてなくても減ることに少し情けなさを感じながら、素直に言った。

「じゃあ、お願い」

わたしの返事に、ドアの外へ呼びかけ顔を見せたメイドさんとかを話す。さつき言っていた館内無線は使われないらしい。

「変な味したり、食えないと思つたら残せよ？」

「うん」

昼間食べた感じでは平気そうだったから、あの時ほど食べ物はない。ユウは何か言いたげに黙つた後、にぶい銀色をした鍵を手

渡してくる。

「これ、この部屋の鍵。できるだけ掛けたままにしておいて。食事持って来させる人には、日本語であいさつするように教えておくから、それ以外の人が来ても開けるなよ」

「七匹の子ヤギ？」

わたしのつつこみにユウは笑い、灯かりつけておくよと言いつつ残してまた出て行ってしまった。

ばたばた忙しい人を見送り、ソファへ深く腰掛ける。今日、この部屋で独りきりになるのは何回目なんだろう。（元？）カレシの実家にいるはずなのに、お付き合いしていた間の記憶がないせいか、よその家・知らない場所だということしか思い浮かんでこない。

一線を超えていたという話も、記憶にないからか自分の身にあつたこととはあまり思えなかった。もしかしたら、実際にべたべたしてみたら感覚が覚えているかもしれないけれど、そんな恐ろしいことは絶対にできない。どきどき初体験はまたいつかの機会に取っておこう。

一人で色々思い浮かべてちょっと顔が熱くなった時、一番多く開け閉めしているドアがノックされた。返事をしないで行くとかなり片言ながらも「食事をお持ちしました」と聞こえ、ユウが言っていた人らしいと分かる。念のために、ドアに張り付きながら鍵を開ける。

「失礼します」

変なポーズでいたわたしへ驚きもせず微笑みかけ、メイドさんは分らない言葉は一言も発しないままにワゴンを置いて部屋から出て行った。たぶん朝から何度もここへ来ていた人で、ユウの専属なのかなと思う。

メイドさんが運んで来た食事を一人ぼっちで食べた後は、またすることがなくなってお腹が休まるまでぼーっとしていた。そうするうちに眠気が来て、これはいけないと隣の部屋から本を持って来て読んでみる。挿絵が多いものを選んだのに、元から読まない身には

やっぱり退屈で仕方がない。

時間が過ぎるのがどうしようもなく遅かった。外はもう暗くなっているけれど、たぶんユウはまだまだ戻って来ないんだろう。せめて先生がいたら、まだ気がまぎれるんだろうに。

本をテーブルに置き、夜仕様になったこの部屋の探検を始める。テーブルの上と、壁際に点々と灯された明かりは不思議な白いもので、たぶん昨夜廊下で見たものと同じだ。蛍光灯な訳はないだろうし、もしかしたらこれも魔法によるものなんだろうか。あまり明るくはできないらしく、どちらかというと間接照明的な感じだ。

ぐるっと周って、一番最初見た時にホテルのスイートルームだと思ったのは、生活感がないからかもしれないと気づく。棚の上にあるものも本当に飾りで、きれいなだけの置物だ。もしここがユウの部屋なのだとしたら、昨日までこの主はずっと留守だったのだから、人が住むところらしさがないのも当然だった。

傷を負って遠いところにまで避難して、普通の十代の子どもとして暮らして。そこでのユウはどんな人だったんだろう。頭打っただら思いだ……さないか。きつと痛くなるだけだ。

なんでユウは、わたし……わたしたちから、自分のことを消したりしたんだろう。

ソファでうだうだして過ごし、ようやく戻ってきたユウに真正面から訊ねた。

「なんで、わざわざ記憶消したりしたの？ いなくなるから忘れればいいって、どうして？ 会わないって言っても写真は残ってるんだから、それ見てみんな不思議に思ったりするじゃない。ていうかそっちが覚えててこっちが全部忘れてるって、すごい気持ち悪いんだけど！」

最後、ほとんど叫びながら言ったことが一番の本音だった。こうやって接していて、ちゃんとした記憶を思い出せたりするのならまだいい。でも、まさしく本能だけが覚えているこの状態は落ち着かないことこの上なかった。

部屋の入口に猛ダッシュしたわたしに驚いた後、どこか遠いところを見る顔で答える。

「逃げる場所を無くすため、かな」

言いながら横をすり抜けソファの方へ歩いていく。それを追いながら、わたしはユウがぼそぼそ話していることを必死に聞き取るうとした。

「向こうでの暮らしはすごく快適だったから。アパートの大家さんなんかも、危ないところに戻らないでここに居てってよく言っていたし。まああの人には、俺らのことただの外国人って思ってもらってたけど」

上着とベストを脱いで背もたれに掛け、ソファに座る。付いて行ったわたしは少し迷ってその隣に腰掛けた。

「こっちではどこへ逃げても、俺が誰かってことやいる場所がばれてしまう。でも向こうでは俺はただの野上勇樹って学生で、家の仕事しろって言う人間もいない。あっちでそうやって受け入れてくれる人がいると思ったら逃げたくなっちまうんだよな」

言いながらわたしの方へ体を傾ける。びっくりして相手を見ると、茶色のような黄色のような薄い色の目でこちらを見上げていた。

「いや？」

一瞬ためらい、首を振る。

「よかった」

わたしの反応に口の両端を上げて笑って、話を続ける。

「あと、たとえ特に親しくなくても、一緒に過ごした年数が長かった人間がいなくなったら、時々思い出してどうしてるんだろって考えるだろ？ もう向こうにいない自分のために、そういう感情を抱く人間が居て欲しくなかったっつーか……、まあ、ただのエゴなだけだよ」

エゴ、自分本位な考え、か。エゴなのは置いといて、ユウはこうやってわたしがくつついて来てしまったことをかなり困ったんじゃないだろうか。わざわざ向こうに自分がいたという記憶を消したのに、また新しく覚えてしまった人ができたんだから。もしかしたら帰る時に記憶を取られるかもしれないけど、今現在わたしはユウがただの学生だったことを知ってしまったている。

「エゴついでにもうひとつ」

「何？」

膝に置いていた手が、上からそつと握られる。肩の重みが消え、そちらを振り向くとテーブルの上の明かりを浴びて陰影の強くなった顔がこちらをじつと見ていた。

「しばらく何もしゃべらずじつとして欲しい」

少しドキドキしながら聞いた、その言葉の意味が分からずちよつと拍子抜けする。

「なんで？」

分からないことは聞け、と問い返すわたしから、まったく目をそらさずに言う。

「膝枕して欲しいから」

……。

「なんでっ？」

思わず少し後ろに下がるわたしを見て、一瞬迷うように目が動き、
「メシ代の代わり」

「うっ」

断れないことを言われた。タダ飯どころかタダ風呂まで入れてもらっている身としては、素直に従うしかない。

膝を空けるためにソファに大きく寄りかかり、両手を肩まで上げてホールドアップの姿勢を取る。口をつぐむわたしをくすと笑い、膝へ倒れ込んでぴったりの場所を探すためか何度か頭を動かす。人の頭って結構重くて、ついでにくすぐりたい。と思っていたら膝を手でなでられた。

「ちよっ、エッチ！」

このまま上へ蹴り上げたいのを我慢しながら言っただけなのに、平然と返してくる。

「タイツはいてるからいいじゃん」

タイツはいてるから、短いスカートでも平気でいるんだけど。文句を我慢しながら見下ろしていると、ユウはすぐに目を閉じてしまった。このまま寝るつもりなのかな……。

顔を上げ、ぼんやり部屋の中を見ていたらすぐ下で声がした。

「ゆっくりできるのも今日だけなんだよな」

見下ろした人は寝返りを打ち、足をソファの肘掛に載せて仰向けになる。いいとこの家の子だっというのに行儀が悪い。

かつちりしたブーツの先を見て、またユウに目を戻す。

「これから、こっちで何して過ごすの？」

こちらを振り仰ぐように少し頭を動かし、また元のように目を閉じる。こうして見れば、まつ毛の色は茶……というかほとんど金色をしていた。もしかして髪は染めていたんだろうか。

「まずは俺が戻ってきたってことの公表。他国に留学していたってことになってるから、帰ってきましたパーティとかやらないといけないんだよ」

「そんなことするんだ」

そういえば海外へ行っていた大物が帰ってくれば、日本でもそんなことをやっていた気がする。

「それで、ひと段落したら父親の手伝い。とあとガーデニングするつもり」

「ガーデニング？ どこで？」

庭なんてどこに……と昼間見た景色を思い返し、気づく。まさか、窓から見えていたあの広い公園が全部、ここの庭だったりした？

疑問に思っていることに気づいたのか、目を開けてから言う。

「ああ、ここ俺ん家の持ち物っただけで住んでるわけじゃないから。やるのは違うところに移ってからだよ」

「そうなの？」

ということは別荘というやつ？ 規模が違う。むしろウナギの寝床に慣れた人間としては、ひがみでなくこんな大きな家に住んでどうするの、って気持ちになる。

考えが顔に出ていたのか、何も口にしてないのに言われた。

「大きな家を建てられるのも、財力とかの証だから」

ああ、なるほど。言われてみれば納得できる。

「実家戻ったら自由に使える空き地あるから、野菜とか、あとひまわり育てようと思ってる」

表の暖かさを思えばすくすく育ちそうだけど、

「なんでひまわりなの？ ゴッホが好きとか？」

「いや。俺芸術科目大嫌いだった。つか高校は音楽選択してたし」
きっぱり言われた。こんな家で暮らしていくのにそれでいいんだろうか。

ユウはまた目を閉じて、代わりのように片手を上へ伸ばして言う。
なんとなく手を添えるとそのまま握り込まれた。

「向こう行つて、情勢が落ち着いたら次に求められるのは娯楽だと思つたから。ヨーロッパの方で、油と観光客目当てに大々的にひまわり畑作つてるところがあるんだ。最近は日本でもやってるけど」

「へえ」

確かに、夏の一面のひまわり畑は一度くらい見に行ってみたと思う。ユウはわたしの手を握ったまま、それを自分の胸元に置いて語り出す。

「この辺り、特に産業も資源もない、農業で細々やっているとところだから。何か目玉になるもの作りたかったんだ。まあ、こっちで育つかどうかはまず問題なんだけどな」

「ここって寒いの？」

触れている、というか触れさせられている手に伝わってくる温度が恥ずかしくて、気持ちをそらせるために聞く。そんなわたしを知ってか知らずか、ユウの調子は変わらない。

「いや、この辺は一年中ぬくいよ。雪も強い日差しも向こうで初めて体験した。なんか、大昔にそういう風に環境を整えた人がいるらしい」

「どうやってそんなことを、と考えここには向こうの人間には理解できない技術があるらしいと思ひ出す。」

「それって、先生が言ってた魔法っていうやつで？」

聞くと、少しの間を置いて目を開く。

「確かに魔法って言葉が当てはまるな」

納得したように少し頭を動かし、また語り出した。

「気候よりも、生態系がどうなるか不安なんだ。俺専門知識なんてないし、ススキとセイタカアワダチソウみたいに、違う植物の生育地域食うことになったらどうなるかと、分からないんだよ」

何か今日は理科の日だな……。

「もしかしたらこっちに根ざしたそういう植物があるかもしれないから、あるならそっちの方がいいんだろうけど」

一度言葉を切り、そうしてわたしをまっすぐ見上げて問う。

「兵庫の方にひまわり育ててる自治体あるの知ってるか？」

「うん、前にニュースで見た」

夏の一面のひまわり畑、で思い出したのがそれだった。かなり遠

いみたいだから、今年は無理だねって前の夏休みに話していた覚えがある。

「メグが来年、一緒に見に行こうって言ってたんだよな」

「え」

驚くわたしに、ユウは何か懐かしむように笑う。

「俺は当然無理なこと知ってたから、そうできたらいいな、つうだけだったけど。メグは本気っぽかった」

また、話した相手はユウってオチだった。そして夏のわたしは、来年まで付き合ってるつもりだったんだ。

「本当にカレカノだったんだね」

「うん。照れくさいからってクラスのやつとかには黙ってたけどな」
ふうん……。

「見に行くことはできないから育てようなんて、自分でもちよつと気持ち悪い発想だっと思うよ」

口元だけで笑いながらの言葉に、わたしは一般的によく言われることを返す。

「そんなことないんじゃない？ 男の方がロマンチストだって言うし」

ユウは声を立てて笑い、くっついていてるわたしにもその振動が伝わってくる。

「失恋をいつまでも引きずるのも男だっていうしな」

言って目を閉じる。今度はいつまで経っても何も話さず、見つめ続けているとおやすみと口が動いた。

「うん、おやすみ」

何か、気の休まらない暮らしが始まるようだから、わたしとこうしていてくつろげるのならくつろげばいいと思う。そうして、定期的に呼吸をし出すまで見つめてから、足を動かさないように上を見上げた。ところどころに装飾付きの木が渡されてある天井は、隅の方が真っ黒い闇に沈んでいる。

わたしは、ユウは、失恋したことになるんだろうか。

結局わたしも寝てしまい、ノックの音で目を覚ましたのはユウが先だった。

「やば」

起き上がってベストと上着を着込むユウを、目をこすりながら見る。壁際に行つて何かを確認した後、早足でこちらに歩いてきて言った。

「もう十一時過ぎてる」

「え」

確か先生は、十二時を過ぎると帰れなくなると話していた。慌てて立ち上がると少しよろけ、ソファに捕まってなんとか耐える。

「大丈夫？」

ずっと膝枕していたからか、足がちょっとしびれている。

「平気」

元凶のユウはそんなわたしの手を取り、支えになつてくれようとする。いけると断り、一緒にドアのそばまで行つたところで唐突にこちらを振り返つた。

「恵美」

何と聞くよりも前にぎゅっと抱きしめられる。

「一年間、楽しかった」

耳元のその言葉に、もう別れなのだと気づく。息ができないほどの力を苦しく感じ始めた頃、ふっと解放された。

ドアのすぐ脇に明かりがあるため、ユウの顔は白く照らされている。言いたいことを我慢している苦しそうな表情なのにいきなりそむけて、わたしが何か言うよりも早くドアを開けて外へ出るよう促してきた。

そうして、早足で部屋と部屋の間にあるドアをいくつもくぐつて行く。ドアはユウが近づく度に開かれ、こんな状況じゃなかったら冗談っぽく「自動ドア！」と叫んでいそうだった。

階段を下り、また部屋の間を抜ける。あちこちに控えている人た

ちは誰も話しかけて来ず、わたしとユウも言葉を交わさない。

少し荒い歩調は、急いでいるからだけではないと思う。付いて来てしまったこと、分らないことを追求したこと、ほかにも色んなことを謝りたくなって、周りから人が遠ざかる度に出そうになる『ごめんなさい』を必死にこらえ続けた。

だって、もしわたしの言葉でユウの気持ちが変わってしまったりしたら……、わたしは向こうへ戻れなくなり、こっちのことを何も知らない人間を背負うことで、きっとユウの立場が悪くなってしまう。同級生だから、彼氏だからじゃなく、ただこの大変そうな男の子に、これ以上のつらい思いをさせたくなかった。

沈黙の道のりの末にたどり着いた、見覚えのある暗い部屋でようやく足を止める。石がむき出しの壁や床といい灯されたるうそくといい、ほかとはかなり違う印象がある。

そして、無人に思えたその奥から、硬い靴音をさせて誰かが歩み寄って来た。

「ユウ、樋口さん」

「先生」

朝以来久しぶりに見る吉川先生だった。言葉が通じる第三者が現れたことで胸をなで下ろしたのはユウも同じらしく、ぎこちなさがちよつとゆるくなった。

見送ってくれるんですか、と聞こうとした言葉は先生の格好を見て止まる。ろうそくの灯りに照らされて渋めのオレンジ色に見える服は、ふくらんだスカートが重そうな豪華なドレスだった。ついじろじろ見てしまっただけから、ニヤニヤ笑う先生に気づき何か言うことを探す。慌てるわたしに構わず、先生は腰に手を当て軽く胸をそらすポーズを取った。

「似合うか？」

その様子にちよつとふき出し、無理に考えるのはやめて素直に訊ねる。

「舞踏会にでも行ってきたんですか？」

いやと否定して、

「身内の食事会。ユウがさっさと抜けたから、フォロー大変だったぞ」

ちよつと驚くことを言った。食事会だけでそんな格好するの？

「すみません」

改めて服を見ている横で、ユウはここまで来る間の緊張がなかったように謝っている。夕飯の後割合早く戻ってきたように思えたのは、人より早く切り上げたからだだったらしい。

そんなユウの姿を見つめてから気づく。

「それってそもそもわたしのせいじゃ」

「そうだな」

わたしの言葉に先生はあっさりうなずき、それにユウが批難するように声を上げる。でもわたしは先生のこういうところは嫌いじゃない。

その格好を頭の前から足の先まで見て、気になったことを訊ねた。

「朝ってズボンはいてましたよね」

あつちはあつちで男役のようににはまっていたけど、この格好も似合っている。先生は「ああ」とうなずき、

「向こうですつとジャージだったから、こっちの服が窮屈で窮屈で」肩を回す仕草をする。そして反対の手を肩に載せ、口元だけで笑いながら言った。

「本当はこっちでは、ズボンはいてると怒られるんだけどな」

「え」

「女は女に決められた服を着ろってことらしい。まあ昔の西洋よりはずつとゆるいから、裁判起こされるようなことはないよ」

先生の言葉に目を丸くしたところで、ユウが割って入って来た。

「ちよつと」

わたしに断りを入れ、先生と分からない言葉で話し始める。プライベートなことなんだろうと手持ち無沙汰ながらも隣でじっとしていると、唐突に生々しい単語が聞こえた。

「現地妻」

「そういう意味かよ！」

いきなりの日本語にぎょつとして二人を交互に見る。先生は楽しそうに笑っていて、ユウはどこか不機嫌だった。ただしさっきみたいな言いたいことを言えないようなものじゃなく、子どもがすねているような感じだ。見つめるわたしに気づいたのか、先生はわたしに向き直る。

「樋口さんは気にしなくていいぞ」

と、言われても。

追及するかしないかを迷ううちに、ドアがノックされて何人かが入って来た。昨日ここへ来た時と同じ黒服の人ばかりでつい後ろに下がったわたしを、ユウは振り返るようにしながら言う。

「昨夜、俺をここに呼び戻したのと逆に、メグを向こうへ送ってくれる人たちだよ」

ああ、昨夜のあれはそうだったんだ。

「館内無線動かしてるのもこの人ら」

ようするに、魔法使いつて思えばいいのかな。ユウの言葉になぜか先生が感心したような声を上げる。

「いい例え思いついたな」

「いいも何も、そのままだし」

そんな風に話していたわたしたちの方へ、黒服の中の一人が近寄って来る。あのおばさんだと気づいてついどころか思い切りユウと先生の後ろに隠れると、その人は何かをしゃべり出した。

「悪いことしました、って謝ってるよ」

通訳してくれたユウに応えるため、後ろに隠れたままでそつとうかがう。こうやって見ても、おばさんからはやっぱり威圧感みたいなものを感じてしまう。

「この人、俺がここにいた時の教育係の代表でさ。だから余計に、知らない人間が現れたことに警戒したんだと思う」

「そつ、なの」

フォローされてもそう簡単に印象は変わらない。緊張し続けるわたしに構わず、横でユウが何か指示を出し始める。黒服の人たちが動き、部屋の中央を囲むようにぐるっと広がる様子は昨夜と同じだ。

その中の一人の黒い髪が、光に当たり一瞬青っぽく見えた。

「きれい」

思わずつぶやいた言葉にユウが振り返る。

「何が？」

「あの人の髪」

指を指すのは失礼だと思って、手で示すようにする。三十代くらいの割合こつい男の人は、注目するこちらを見ていぶかしげにしていた。

「一瞬青く見えたから。ここって青とかピンクとかの髪の人いるの？」

「ああ、あの人」

結構長いこと男の人に話しかけてから、ユウはこちらに向き直る。「光の加減で違う色に見えるんだよ。カワセミが青い鳥なのと同じ原理じゃないかな。こっちでも珍しいよ」

「へえ」

カワセミが何か分からなかったけど、違う星と言ってもそんな奇抜な髪や目の色をした人はいないらしかった。似たようなところで生命が発生すれば同じように進化する、か。

わたしが隠れるようにする間にも、ユウと時々先生が何か言うて用意が進んで行く。そして、開けられていたドアが閉められると同時に、大勢の人がいるにも関わらず部屋は静まり返った。ここへ来た時と違うところは、ユウの格好と先生がいることだけだ。

「さて、準備完了だ」

先生が言い、「元気でな」と腕を軽く叩く。

「はい」

奇妙なところで再会した先生とも、これで永遠にお別れだ。本来なら退任した時が最後の顔合わせだったから、街中で偶然会ったよ

うな感覚であまり悲しさとかは湧いて来ない。

「じゃあ、わたしはそこにいるよ」

そして先生は端の方へ寄る。部屋の中央に並び、一瞬正面から見つめ合ったユウは、そのまま何も言わずに離れて行こうとする。今更、人のいる場で話すことはないということだと思う。背中を見つめてすぐそらし、あることに気づいて呼び止める。

「あ、そうだ！」

ひとつ、聞いていなかったことがあった。先生と同じ方へ行こうとしていたユウが振り返る。

「何？」

「本名なんて言うの？　がんばって聞き取るから教えて」

言ってくれた名前を、何度かつぶやいてカタカナで表記できそうな名前にする。

「エークレーデス？」

「それでいいかな。文字だところ」

言って空中に何かをなぞる。指の軌跡を見つめ、書いている方向に気づきふと訊ねる。

「縦書き？」

「うん。縦に、左から右に書く。この辺は右利きの人間が多くて、そのための文字だから。右手で左上から右下に書いて行くと手が汚れないんだよ」

言われて空中に文字を書いてみる。あ、確かに。

「漢字なんかも右利き用の文字だよなあ」

「うん」

書道の時間、左利きの子は大変そうだった。書いてくれた文字は覚えられなさそうで、エークレーデスという名前だけを心に留めておこうと思う。

「じゃ、もういい？」

聞かれ、うなずく。

「うん」

そしてユウも壁際に寄り、わたしは部屋の中央にぽつんと立ち尽くす。ややあつて黒服の人の何人かが節を付けたような言葉を上げ始め、周りに光が満ちて行く。それに目を閉じる直前つい言った。

「ばいばい」

小さな声だと思ったのに、わたしの耳にもユウの返事が届いた。
「うん。ばいばい」

射るような強い光で目を閉じて、次に開いた時にはどこかの屋外に立っていた。特に飛ぶ感じも落ちる感じもなかったのは、昨夜力ラオケ屋から移動した時とまったく同じだ。

急な寒さに身を縮めながら周りを見回し、ここがどこかの住宅地だと分かって体の力が抜ける。石の建物にも広い敷地にも縁のない、なじみ深い現代日本の風景だ。

すぐそばにあるものがマンションか何かの玄関ドアだと気づいた時に、ぱっと表の明かりが灯った。ドア横の表札プレートにはマジックで「野上」と書いてあって、もしかしてと思ううちに内側からドアが開く。

「わっ！」

「おお」

少し驚き、数歩下がるわたしを、向こうも驚いたような声を上げて見る。出てきたのは見た感じ一つ二つ年上の、ちょっと濃い目の顔の日本人で通りそうな男の人だった。

「樋口恵美さん？」

「はい」

間違はなくフルネームを呼ばれ、この人が何度か話に出ていた一緒に住んでいた人なんだろうと思う。中からの光を受けて髪の毛が金色に見えるその人は、玄関のドアを大きく開ける。

「ユウから連絡受けたシンイチです」

「はい、聞いてます」

うなずいたわたしに笑いのような表情を作って、人が通れる分のスペースを空けて手で中を示す。

「こちらへどうぞ。居間にある電話を使って下さい」

おじやましますとほとんど段差のない上がりかまちを過ぎ、通された居間では五十歳くらいのおじさんとおばさんがテーブルについ

て深夜のローカル番組を見ていた。うちの家と変わらない、八畳程度しかないそのこと、あのユウがすぐには結びつかない。本当にこんな、普通の家で暮らしていたんだろうか。

「おじゃまします」

「はい、いらつしゃい」

改めて言っただけなのに、こちらを少し振り返るようにしていた人たちが答え、気を使ってかテレビの音量をかなり落としてくれた。

「電話はここなので」

言うだけ言っただけでシンイチと名乗った人は離れていく。ユウから何をどう聞いているのか、かなり距離を置かれている気がする。保護しているような相手が紹介してきた人間なんだから、普通には対応できないか。

気を取り直し、案内してくれた電話の前で誰にかけるのかを悩む。いきなり家は怖いけれど友達の番号は誰も覚えていない。かなり悩んでから、試しに自分の番号を押してみた。

電源は入っているらしく、留守番サービスにかかる。何と入れるか考えているうちに切れてしまい、言うことを決めてからかけ直す。

「恵美です。その携帯、今誰が持つてるの？」

短く言っただけでよかったのかと受話器を置いたところで、目の前の電話が鳴りだした。慌てて後ろを振り返り、テーブルの一番電話に近い位置に座っていたシンイチさんと呼んでナンバーディスプレイを確認してもらったと、「出て下さい」と言われた。

「はい……もしもし」

出た声はよくないんだものだった。

「メグ？」

「あ。みつちゃん」

小学校から一緒に、クリスマスイブのアルバイトを協力し合ったりした子だ。わたしの受け応えを聞いて、シンイチさんはテーブルの方へ戻る。

「昨夜どうしたの？ いきなりいなくなったりしてさ」

怒っていないことにまず安心して、
「ごめん、ちよつと一身上の都合で」

何かのあいさつみたいなことを言う。巻き込まれて地球じゃないどこかへ行っていましたとは言えない。みっちゃんは何かを考えるように間を置き、訊ねてきた。

『そこつてもしかして彼氏の家？』

「え？ 違うよ」

彼氏だった人の家族の家、ではあるかもしれない。

『なーんだ、違ったのか』

言葉ほどはがっかりしたようでもない調子で言うみっちゃんに問う。

「何が？」

『カバンもコートも置いていなくなったから、カラオケボックスで彼氏と会って、そのまま泊りに行ったのになって思ってた』

「そんなことするかっ」

『まあ違うよねーとも思ってた』

いつものノリで話すわたしに、向こうも同じように返してくる。

「あ。カラオケのお金どうした？」

『わたしが立て替えておいた。あと、おばさん宛てに何回かメール打つといたよ。勝手に使ってごめん。ほかのメール見たりはしてないから』

「ううん、ありがとう」

嘘をつかれていないことを願いつつお礼を言う。と、笑う様子が伝わってきた。

『おばさんの返事が面白かった』

「日本語崩壊してて笑えるでしょ」

『うちの親は絵文字いっぱい使ってくるよ。そのうちにギャル文字使ってくるでちよつといやだわ』

それにわたしも笑い、『それでさ』と何か話そうとするみっちゃんを止める。

「あ、ごめん。今人の家で電話借りてるから、長話できないの」
『ああそうなんだ。じゃあどうする？ 今からでも携帯とか取りに来る？』

「全部みつちゃんが持つてるの？」

『うん。あんたと家近いし、それがいいだろうって』
「今から行つていいの？」

時計を探して周りを見ると、テーブルについていたおじさんが気づいて壁の方を示してくれる。アナログ時計が指していたのは十二時五分過ぎ。当然夜中だ。

『いいよ。どうせうちの家族まだみんな起きてるし』

うちの親は十一時前にはどっちも寝てしまふ。兄貴だけはたぶん今の時間でもバイトでまだ帰ってきていない。

「じゃあ、ちよつとしたら行くね」

そうして電話を切つてから、家へ帰るための交通手段がないことに気づく。自転車はカラオケ屋に置きっぱなしだし、たぶんこの時間はもうバスがない。深夜に独り夜道を歩くか、いつそのこと人生初・自分でタクシーを呼ぼうか迷っていると、声が掛けられた。

「終わりました？」

「はい、ありがとうございます」

振り向いたテーブルから立ち上がるシンイチさんにうなずく。おじさんとおばさんもこっちに興味は持っているみたいだけど、テレビの方に注目したままだ。

「じゃあ、家の近くまで送ります。ちよつと待ってて下さい」

ここがどこなのかを聞くより先に、シンイチさんは言つて玄関の方へ行こうとする。部屋の入り口辺りまで行ったところでその行動に気づき、慌てて止めに入った。

「いえ、ここがどこか言つてもらえれば、自力で帰れます」

中学校の卒業アルバムにあった学校名からすると、家まではどんなに遠くても一時間はかからないはず。そう思つて断るわたしに、シンイチさんは奇妙なことを言う。

「もう夜も遅いし、すぐに目的地へ着ける方法があるからそれですりますよ」

首をかしげるわたしへ、更に説明してくれる。

「向こうとこちらとをつないだ方法と似たようなやつです」

言われ、やっと納得する。違う星同士をつなぐことができるのだから、もっと近い距離でできないわけがない。それでも見ず知らずの人に送ってもらうということにはためらいがあつて、わたしは少しうつむき上目づかいになつてしまふ。

「いいんですか？」

念を押すわたしにシンイチさんは変わらない様子で言う。

「はい。家の前まで送りますか？ それとも図書館辺りへ？」

みっちゃんとの待ち合わせを考えれば、市立の図書館の方がお互いの家まで等距離でよさそうだ。そう思い「図書館でお願いします」と返事をしてから、あることに気づく。

「わたしの家知ってるんですか？」

「はい」

まったく悪びれずに返事をした人に不審を抱き、テレビを見たままのおじさんとおばさんを振り向くとこれまでと変わらない様子でいた。話は聞いているはずなのに、シンイチさんがわたしの住所を知っていることに疑問はないらしい。まさか、わたしがユウと付き合っていたから？

どうして知っているのか、聞こうか聞くまいか迷ううちにシンイチさんの方から言ってきた。

「気持ち悪いでしょうけど、ユウはそういう立場にいるものですか」

「監視……？」

思わずつぶやいた言葉に、シンイチさんはただ笑っただけだった。そしてその表情のままでわたしを促す。

「それじゃあ、移動しますので先に靴はいて下さい」

ゆるゆるつなずき、どこか別室へ行つたシンイチさんを置いて玄

関に立つ。戻ってきた人はコートを着ていて、手に何か棒のようなものを持っていた。

「じゃあ、いいですか？」

うなずきかけ、思い出して奥へ叫ぶ。

「お邪魔しました！」

姿のないまま「いいえー」とおばさんの声がして、見送りはしてくれないのだな、と思う。まあ、一言も話さなかったから仕方ないか。

「じゃあ、ちよつと失礼」

言ってシンイチさんはわたしの肩に手を置き、向こうで聞いたものと同じような言葉をつぶやく。一瞬まぶしい光が目の前を覆い、それがなくなると先ほどまでとは違うところに立っていた。

目をこすり、かなり寒いことに気づいて自分の肩を抱く。それよりも一瞬前に手を外していたシンイチさんは、少し身を引いてから言う。

「着きましたよ」

「え」

言われて周りを見ると、そこは確かに家の近くにある図書館の、裏の自転車置き場だった。とつくに閉館している今の時間に人影はなく、建物の中に灯っているぼんやりした明かりと離れた位置にある街灯だけが、今どこにいるのかを教えてくれていた。

「あの、今何時ですか？」

訊ねるわたしに、「家を出る前は十二時十五分でしたよ」と言う。携帯も時計も持っていないらしい。

「時間は経っていないので、早くお友達のところへ行ってあげて下さい」

いまいち信じられない人へそれでもうなずいて、寒い中を歩き始める。敷地の端まで歩いたところでお礼を言っていないことに気づき、振り向いたけれどもうさっきの男の人はいなかった。

みっちゃんから返してもらった携帯で確認した時刻は十二時十九分。確かにまったくゼロの時間でユウの家から図書館まで移動したらしい。

コートを着て、携帯をいじりたいのを我慢しながらみっちゃんからの問いに答える。

「昨夜どこ行ってたの？」

「ええっと……」

何と答えるか図書館からここまでずっと考えたけれど、結局何も思い浮かばなかった。

「ノガミユウキって覚えてる？」

結局逆に訊ねたわたしに、みっちゃんは少し考えてから返してくる。

「知らない。誰？」

ちよっと迷ってから「クラスメイトだった人」と正直に言う。

「そんなやついた？」

みっちゃんは本当に不思議そうで、やっぱりわたしと同じく覚えていないらしかった。

「いた、みたいだよ。なんか、途中で引越したとか」

どう説明するか迷いながらだったために、かなりしどろもどろになった。

「わたしも忘れてたんだけど、こないだ卒業アルバムで名前見て。どんなやつだったかなって思ってたら、昨夜のカラオケ屋で会ったの」

まったくの嘘じゃないので、ここはそんなに後ろめたい思いはしなかった。

「へえ。わたしも後で見てみようかな。で？ 昨夜はそいつのところにいたとか？」

「え……あ、うん」

正直にうなずくと、驚いた後ににんまり笑われた。

「えー何何？ お持ち帰り？」

「ち、違うの。うちのお母さんが入ってるテニスサークルの主催者の息子さんで、その……」

自分でも段々何を言っているのか分からなくなってきた。みつちゃんは軽くわたしの肩を小突き、にやにや笑いのままで言う。

「ま、今日はもう遅いから明日ゆっくり聞かせてね？」

「うん……。あ、卒アルに野上勇樹って子が写ってるのは本当だから！」

「はいはい分かった、後で見てみる」

手を振るみつちゃんと別れて、家までの道を歩き出した。今夜中にいい言い訳を考えておかないといけないな……。

メールの確認をしながら歩き、五分もしないうちに自宅がある団地にたどり着く。そつと重いドアを開けて入ると、中の電気は玄関の薄暗いもの以外は全部消されていて、両親はもう寝てしまっていると分かった。それほど心配してなかったみたいで、ほつとしたような少し寂しいような気持ちになった。

こつそり靴を脱ぎ、入ってすぐ右手にある自室へ一日以上ぶりに入る。スイッチを入れるとぱつと蛍光灯の明かりが灯り、そのまぶしさにちよつと目を細めた。向こうの灯かりはどれもぼんやりしたものだったな。

六畳もない自室の、ベッドに座って息を吐く。小学生の時から使っている学習机、雑誌ばかりの本棚、わざわざ高さのないものを買ったクロゼットが二つ。それだけで、もう床に座るスペースもなくなってしまう。

しばらくの間ぼうつとしてから、気を取り直しひとまず卒業アルバムを開いてみた。急に戻ってきた馴染み深い現実世界のことには圧倒されて、もしかしたら「野上勇樹」は存在していないんじゃないやという気分に、またなっている。

幸い、昼間見たのと同じページの同じ位置にユウの顔写真は載っていた。後ろの方のページにみんなで書き合った、たくさんのメッセージに笑ってしまってから最後の最後、厚紙との間にはさんであ

る封筒に気づく。

「あ」

つい最近、卒業式の日になって受け取った、春の遠足の時に行動の班ごとで撮った写真だ。カメラ担当の子が現像を忘れていたらしく、今になってやっと貰ったんだった。

「……………」

全部で四枚あるその写真の、すべてにユウとわたしが写っている。遠足の班は出席番号順に割り振られたから、きつと同じ班だったんだろう。まだ知り合って間もないせいかな、ほかの子たちと同じでどこか距離を置いているように見える。

遠足の写真ともうひとつ、携帯で撮った写真がきつと手元に残っている。機械を開き、写真フォルダを押す手はなぜか少し震えていた。

卒業式の時の写真があることは予想通りで、それ以外にも顔を寄せ合ってアップで写っているものや、ただファーストフード店で座っているユウを正面から撮ったものなんかが出てきてちよつと頬が熱くなる。

もしかして……、結構ばかづぶるだった？ それとも、一線を超えていたらしいことを思えばこんなもののかな。クラスメイトには内緒にしていたように言っていたけれど、これはばれていたんじゃないだろうか。

一通り存在をたどった後、携帯を閉じて立ち上がる。確かにいたことは分かったから、何か考えるのはまた明日にして、もう今日はお風呂に入って寝てしまおう。

入り慣れた我が家のお風呂で全身を洗い終わり、湯船につかる気持ちよさを味わっているとどうしても今日一日の間にあったことが思い出されてくる。裸にされた上に縛られ床に転がされるなんて、そうそう経験できないしみんなしたくないことじゃないだろうか。

始まりの記憶以外は、全部どこかふわふわした出来事だった。とうに学校から去った先生と再会して、覚えのない彼氏と色んな話を

して、一緒にご飯を食べて、抱きしめられて、バイバイってお別れして。

子どもの頃に大変な目にあってここに引っ越してきて、中学校と高校に通ってわたしと同じクラスになって、こっちはただの学生だったって言うてたのに本当は見張られていて。きっとユウ自身も、そのことはちゃんと分かっている。

そんな中で告白してきたわたしと付き合って、そして何も言わずに去ろうとしていた。

「……っ」

急に鼻の辺りが痛くなり、こらえようとしてもできずに熱いものがこぼれ出た。どうしてだろう、何かがとんでもなく悲しい。

全然止まってくれない涙と鼻水を、洗面器に溜めたお湯を変えながら何度も洗い流す。そうしながら気づきなくなかったことに気づいた。わたしの根っこの部分では、今この時もあのユウのことが好きなんだ。

顔を半分お湯につけて息を吐き、できてはすぐに消えるあわを見つめながら思う。

どうして向こうにくつついて行っちゃったんだろう。何も知らないまま離れていたなら、きっと彼氏がいたなんてこと考えもしなかったのに。

そう、自分の行動をうらめしく思ってから違うと気づく。

忘れたままだったら、理由の分からないことで悲しむ羽目になっていた。何か失ったものがあるはずなのにそれが分からなくて、かなり気持ち悪い思いをしていたはずだ。だから、今日こうしてゆっくり過ごせたのは、わたしにとってはよかったと思う。……ユウにとってよかったのかは、まったく想像できないけれど。

湯船から身乗り出して思い切り鼻をかみ、手と顔をせっけんでよく洗う。そうしてからえいと立ち上がった。

ユウがこれからどう過ごして行くのか、こっちでのことはただの想い出として切り捨ててしまうのか。それをわたしが知ることはで

きない。

ただ、わたしは今日のこの出来事を、ずっと忘れないでいようと
思った。

エピソード

大学に入って、慣れようとしているうちにあっさり夏休みになってしまった。わたしの学科は真面目な子ばかりが集まっているらしく、未だ合コンも飲み会も経験していない。サークルに入っていればそういうことにも縁があるのだろうけど、特に入りたいと思うものがないまま気がついたら勧誘の嵐は収まっていた。

今のところ、わたしがしている大学生らしいことといえば、新しくバイトを始めたことだけかもしれない。

五月の半ばから勤め出したのは、地元の駅前は何件かある本屋さんのうち、参考書の品揃えが一番いいと思っていた店だった。受験生の時によくお世話になったなと面接に行ったところ、幸運なことに一件目で合格して、もうすぐ二ヶ月が経つ。

バックヤードに残っていた、直前にやめた人のバッジが野上だったことは、偶然なのかなんなのか。そういえば三年の初めの頃、ここでそんな名前の人と話をした覚えがある。ただの店員さんのことが頭に残っていたのは、たぶんユウと同じ名字と思ったからなんだろう。もしかしたら、兄弟のふりとかしていたのかもしれない。

消されなかった記憶は、けれどほかの当たり前の出来事と同じように、時間が経つにつれて少しずつ褪せている。高校を卒業した日に行った遠い場所は、後からただの旅行とあまり変わらないことのように思えてきた。

その度に、窓から流れ込んできた三月にしては暖か過ぎる空気とそっけない食事、硬い石の床のことを考える。そしてそこで話した、非常勤の先生と同級生の男の子のことも。

元気でいてくれたらいいな、と思う。ここからエールを送っても届きつこないのは分かっているし、のんきな学生をしているわたしに励まされても人によったらイラッと来てしまうかもしれない。でもあのユウなら、きっと笑って「ありがとう」と言ってくれる。

——わいわい騒いでいた高校生の一群が去った後、その棚を片づけに行っ
て思わず手を止める。一面のひまわりの写真が、出しっぱなしになっ
ている雑誌の表紙に載せられていた。どこか外国のものらしい、広
い広いひまわり畑。

中身を確認したい気持ちを抑えながら片づけて、レジまで戻りな
がら思う。

夏休みに入ったら、一人でもいいから去年約束したひまわり畑を
見に行こう。そして携帯のカメラで撮った写真を、高校時代のアル
バムに足したら。

もう会うことはない遠い遠いところにいる人とながれるような、
そんな気がする。

終わり

番外編：つつじの頃（前書き）

本編より約一年前、恵美とユウが知り合った頃の話。

番外編：つつじの頃

見上げた空は、今にも雨が降り出しそうに陰っていた。予報では日中は大丈夫と言っていたものの、帰宅途中に降り出されてはたまらないために、恵美はさつさとペダルをこぎ出す。

この学区で上の下という位置にあるこの高校は、部活にはあまり力を入れていない。授業が終わると同時に帰ってしまう人間の方がほとんどで、ほんの少し居残りをしただけでも取り残された気分になっってしまった。

速めの速度で校舎の横を抜け、門から出て人気のない住宅地を駆ける。通い慣れたルートであるためか走ること以外にも意識が向き、ふっと思い浮かんだのはもう間もなくにまで迫った学校行事のことだった。

三年になってもうすぐ一月、ゴールデンウィークまでは後一週間。その直前にある遠足のことを思い浮かべると、少し憂うつな気分になる。

学年が変わってすぐだからと出席番号順で分けられた班には、心置きなく話せる相手が一人もいなかった。近くに座っているから話す機会は多いものの、それと丸一日行動を共にすることは別だ。ロングホームルームでの話し合いからほかの子たちも乗り気じゃないらしいと分かって、余計につまらなさそうという気持ちが湧き始めていた。

せっかくこの辺りで一番おしゃれな街に行くのだから、どうにかして楽しめる機会が欲しい。幸い、今年の遠足は現地集合・現地解散のため、三時に班が解散した後は好きな相手と街を回ることができるはずだ。今のうちに、行きたい場所を決めておこうと思う。

そうと決まれば情報収集、と空模様も忘れて帰宅途中にある駅へと道を折れる。急行が停まるこの駅のそばには本屋が三つもあり、それぞれ参考書が多い、漫画を描く用の道具などが置いてある、力

フエが併設されている、と傾向が分かれていた。その中から、恵美は一番表通りに近い、参考書が多い店へと向かう。

夕方だから中は制服姿の学生でいっぱい、それを避けながらガイドブックのコーナーを探し歩く。見つけた棚で目に付いたものを手当たり次第にめくりながら、どこへ行くのか思いを巡らせる。

ファッションの街、港町であるあそこは、山に近い片田舎のここからは日帰りで行けるあこがれの地だ。いつか、学校行事などではなくのんびりと、できたらカレシなんかと歩いてみたい。

自分の想像にドキドキしながら文庫サイズの小さなものを読んでいた時、誰かに「失礼します」と声をかけられ集中がそがれた。言ったのはエプロンを付けた店員で、後ろに着いて来ていたおばさんに何かを説明し始める。

邪魔にならないように棚の前から移動しかけた時、そばにいる店員の名札が目に入って動きを止めた。『野上』だ。

大仰に感謝の言葉を述べながらおばさんが去った後、大学生くらいに見える店員は、慣れた様子で「何かお探しですか？」と訊ねて来た。そこで初めて、じつと胸元を見つめていたことに気づき、あわてて首を振る。

「いいえ」

最近意識に引っかけている相手と同じ名字だったために、つい見入ってしまった。店員はそんな不審な動きも気にした様子なく、どこか日本人離れた顔立ちに愛想笑いを浮かべ、「ご用があればお声かけ下さい」と離れて行った。ほっと一息つき、持ったままだったガイドブックを棚に戻した。

買うつもりはないのだし、どれを見ても載っていることは大して変わらない。大体の場所と名前だけチェックしておけば、学校で配られる白黒コピーの地図だけで十分そうだ。

そう判断し、帰ろうと出入り口に向かいかけて足を止める。入り口脇のレジにさっきじつと見つめてしまった店員が立っている。ぶしつけに見てしまったことを今更ながら恥ずかしく思い、しばらく

したら居なくなるかな、となんとなく店の中をうろつき始めた。

文庫コーナー、重そうな本のコーナーと回り、普段縁のない実用書のコーナーにまで足を踏み入れる。目で意外に面白そうなタイトルを追う最中、この間友人から言われた言葉を思い出してしまっていた。

『最近野上と仲いいよね』

そういえば、遠足の同じ班にはあいつがいるのだ。今年初めて同じクラスになった、学年のちよつとした有名人が。

恵美のすぐ前に座っている野上は、クォーターだというのはつきりした目鼻立ちと、飛びぬけてはいないものの平均より高い身長から、前々から注目されてはいた。それが学年全体に、悪い意味で知られるようになったのは、修学旅行の後からだった。

家の都合だとかで修学旅行の全日程を休み、それによって文化祭や体育祭の当日に休んでいたのもズル休みしていたのではと言われるようになったのだ。部活動と同じく、勉強以外の学校行事全体に手を抜いているような学校だから、イベントの日に自主休学している人間はほかにも居る。が、準備期間には積極的に協力していて当日だけ休むというその姿勢は、同じようにサボった人間から見ても少し異質らしかった。

今年になってからちよくちよく話すようになった恵美も、最初は『きつと変な子なんだろう』と身構えてしまっていた。が、今はただほかの男子よりちよつと大人しいやつ、程度の印象しか受けていない。学校行事はほかの学年とも関わる分、いつもより気を使うものだから、幼い頃外国にいたという野上には馴染みにくいものなのだろう。

なんてことを考えていたせいか、当人が目の前に現れた時は転びそうになってしまった。大判の本を真剣にめくっていた人は、たたらを踏んだこちらにちらつと目をやり、そして顔を上げる。

「樋口さん？」

一度家に帰ったのか、見慣れた制服姿ではなくラフな私服だった。

その姿に少しどきつとして目をそらすようにその手元を見ると、「はじめてのハーブ」というタイトルが目に入る。意外というか、はっきり言って似合わない。

もう一度顔を見上げた時、恵美が見ていたそれを本棚に戻してから彼は訊ねてきた。

「面白い物？」

「ううん、立ち読み」

即、答えると少し笑われる。たぶん苦笑いというだろうその表情に、馬鹿正直に言ったことを少し後悔した。そういえば、昼休みが始まると同時にどこかへ消えて予鈴が鳴る直前に帰ってくる野上へ、どこへ行っているのかと聞いたことがある。確か、「図書室でばーっとしてる」などと言っていたはずだ。どうやらこの人は本が好きらしい。

棚にある本を見て、写真ばかりの本でも読めば読書になるのかなと考えていた時、唐突に訊ねられた。

「ああ、そうだ。樋口さん今ヒマ？」

数度まばたきしてうなずいたこちらを促し、「いいところで会った。ちよつといい？」と先ほどまで居たガイドブックのコーナーへ連れて行かれる。そして、野上は雑誌型のガイド本を手に取りぱらぱらめくり始めた。

「俺、あの辺ってまったく分かんなくてさ。こないだ何回か行ったことあるって言ってたから、今度行く場所がどんなところか教えてくれない？」

持った雑誌とうつむいた顔、両方を見比べて「わたしでよかったら」と答える。その返事を聞いた野上に笑いかけれ、ちよつとドキッとした。

「とりあえず、どういう風に歩くかだけでも知りたいんだ」

クラスメイトが見ていたらどうしよう、と思いつながら大きく開いた雑誌を隣から覗く。載っている地図を指さし、すぐそばに立つ人へ順に示すとややあって不満そうな声を出した。

「これ、かなり歩くよなあ」

「うん」

一度坂を上り、また下って駅前を通り過ぎ旧居留地の方へ。一般的な観光ルートではあるが、歩くとなればそれなりの疲れは覚悟しておく必要がある。

異人館の紹介が載っているページを開きながら、外国の映画俳優のようなうなり声を上げて言う。

「やっぱスニーカーで行くかあ」

その少し気落ちした様子に恵美は顔を上げた。

「遠足なんだから運動靴でしょ？ 何で行くつもりだったの？」

「これ」

言って持ち上げた足は皮靴を履いている。恵美の高校は無駄に校則が厳しいことで有名で、野上が履いているのは登下校用に指定されているものだった。

不思議に思いながら靴を見つめ、改めて靴の主を見上げる。

「なんでそんなの履いてるの？」

何の飾り気もない黒い靴は、わざわざプライベートの時にまで履くものではない。返事に困ったのか、またうなづいてから言う。

「あんま物増やしたくないから」

「スニーカー持っていないの？」

「ないこともない」

その奇妙な返事に首をかしげる。なんとかの靴は何円もした、などという男子の話を聞いたことがあったため、男の子はスポーツシューズが好きなのだと勝手に思い込んでいた。ないこともない、ということとは誰かと兼用？ もしかして靴買えないほど貧乏？ と失礼なことを考え、横目で着ている服を見た時に第三者の声が掛けられた。

「立ち読みはご遠慮下さい」

後ろからの囁くような声に、思わず肩をすくめる。勢いをつけて振り返り、向いた先にいたのは見覚えのある若い店員だった。ドキ

ドキする心臓をなだめる横で、野上がため息をつく。

「なんだ……、シンか」

確かに同じ名字の二人はどうやら顔見知りらしい。見比べる横で、店員の方が雑誌に目を向けながら言った。

「お客さん、それくらい買って下さい」

「一度しか行かないのに」

「俺が活用させますよ」

短いやり取りの後、ほんの少しの間紙面を見つめてから、野上は「じゃあ買っ」と雑誌を閉じた。なんとなく離れるタイミングを見失い、レジを終えるのを待ってから一緒に外へ出る。

「今の人知り合い？」

訊ねた恵美を見下ろし、すぐに答えてくる。

「兄貴」

「やっぱり」

歳の頃からそうだろうと思っていたために言っではみたものの、二人はまったく似ていなかった。日本人っぽくない顔立ちという点は同じなのに、兄弟というにはどこか違和感が大きい。

恵美が考えていることに気づいたのか、空いている手を軽く上げて言った。

「似てないってよく言われる」

手のひらを上にしたその仕草は外国人のようで、学校では見たことがない。もしかしたら、あまりやらないようにしているのかもしれないなかった。

恵美が制服のポケットに入れた鍵を探していると、野上は冗談めかして言う。

「つい先月まで、同じ学校にいたんだぜ？」

「え」

見つけた鍵をそのまま手に握って、言った相手を見上げる。先月、去年度の三月まで同じ学校だったということは先輩ということだ。

「兄弟で同じ学校って珍しいね」

「そう?」

不思議そうにしているので、一度うなずき補足する。

「わたし、お兄ちゃんと同じ学校は絶対いやだったから、すごい勉強がんばったのに」

言つと声を立てて笑われた。周りのほかの子も、きょうだいと同じところへは行かないように調整している子が多かったように思える。

あのお兄さんも修学旅行とか行かなかったのかな……と見つめる先で買ったばかりの雑誌をめくっていた野上は、何かに気づいたように手を止めた。

「ハーブ園ってあるんだな」

確かかなり山の方に、あるらしいとは知っている。遠足の解散後に行くのは無理だろうと思いつながらも訊ねてみた。

「ハーブ好きなの?」

「うん、まあ」

そういえばさつきもそんな本を読んでいた。緑が多めのカラー写真を覗き込む頭の上で、野上は話を続ける。

「どっちかっていうと有機農法とかそういうのに興味あるかな。効率を求めるか安全を求めるかっていうと、最近は安全の方が重視されてるけど、今のこの世の中で食料を行き渡らせるためには効率優先にしないと無理が……何?」

見つめるこちらに気づいたのか、野上は言葉を途中で止めた。

「ううん、なんでも」

よく分からない内容ながら、真剣に話していたためについて見えてしまっていた。こうして私服を着ている相手へ改めて向き合うと、同じ歳のはずなのに向こうの方が大人っぽく見える。やっぱり外国人の血が入っているからだろうか。

目をそらした恵美を今度は向こうが見つめ、少し照れて来たところで野上は今気づいたように空を見上げた。

「じゃ、雨降りそうだしそろそろ帰るわ」

「あ、うん」

握ったままだった鍵を使い、愛車の錠を外す。カラカラ押して、最後にもう一度だけ「じゃあ」とあいさつし合ってから別れた。

自転車をこぎながら、最近仲いいよねと言っていた友人を思い出す。男子と女子の仲がいいというのは、そのままコイバナに繋がる。

あの野上を、そういう対象に見れるかと聞かれれば、つい一時間前ならそんなことないよと答えていたが。……本当に、いいかもしれない。

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0139p/>

次はひまわり畑で

2010年11月19日22時40分発行